

東京神学大学大学院 修士論文

提出年度 2023 年度

論文題

詩編 15～24 編の全体構造から見た詩編 23 編の中心主題

—主と共に命に至る旅の歩み—

専 攻 聖書神学（旧約聖書神学）

指 導 田中 光 准教授

提 出 日 2023年9月7日

提 出 者 原田 雅子

詩編 15～24 編の全体構造から見た詩編 23 編の中心主題

-主と共に命に至る旅の歩み-

目次

序論	5
第 1 章 詩編 23 編の試訳と本文批評・文法上の註	7
1, 試訳	7
2, 本文批評および文法上の註	8
第 2 章 詩編 23 編単体の解釈より導き出される中心主題と批判的考察	11
1, 類型論による解釈	11
(1) 羊飼いの比喻を重視する解釈	11
(2) 食卓の主の比喻を重視する解釈	12
(3) 結合型・一貫型の解釈	12
2, 批判的考察	13
第 3 章 詩編 15～24 編の解釈史・批判的考察と Philip Sumpter の中心主題	13
1, 詩編 15～24 編の集中構造とメッセージ	13
(1) Pierre Auffret による集中構造の発見	13
(2) 集中構造の機能から導き出されるメッセージ	14
① Frank Lothar Hossfeld and Erich Zenger (1993)	14
② Patrick Miller(1994)	15
③ William Brown(2010)	15
④ 飯謙 (2006)	15
(3) 批判的考察	15

(4) 小結論	16
2, Philip Sumpter の複層的な視点から捉えた 15～24 編の中心主題	17
(1) アスペクトという知覚理論	17
(2) 「枠となる詩編」 (15・19・24 編) による神学的主題の提示	17
① 「枠となる詩編」の構造	17
② 「枠となる詩編」のから提示される神学的主題	18
(3) 「内部的詩編」による神学的考察の実存的な深まり	19
① 16/ 23 編	20
② 17/ 22 編	20
③ 18/ 20・21 編	20
(4) サムエル記の文脈から導かれる神の媒体としてのダビデ	21
① 表題「 דָּוִד (ダビデの詩)」の意味	21
② サムエル記のダビデ	21
③ 神のイスラエルの贖罪の媒体としてのダビデ	22
(5) 小結論	22
(6) 批評	22
第 4 章 詩編 15～24 編の物語的展開 – Philip Sumpter との対話	23
1, 詩編 15～24 編の物語的解釈の紹介及び批判的考察	23
(1) Lohfink	23
(2) 大住雄一	24
(3) 批判的考察	24
2, Sumpter の神学的考察を基盤とする物語的展開「死から命に至る旅」	25
(1) 「死から命に至る旅」の物語を示すモチーフの連鎖	25

①「死」と「命」に直接関連する語彙によるモチーフの連鎖	25
②「揺るがない (מוט לא /לבל) 」と「死 (מות) の否定」のメタファー	29
(2) 物語を補完する語彙の連鎖及び Sumpter の理論との整合性	30
①とこしえ	30
②「義」	32
③「道」と「完全」	32
④「清さ (純粋さ/罪の清め) 」と「完遂」	33
(3) 15～24 編の物語的展開の提示「死から命に至る旅」	35
(4) 小結論	35

第 5 章 15～24 編の物語的展開から見た 23 編の中心主題

－「主と共に命に至る旅の歩み」

1, 23 編の主題「主と共に」－構造分析等による「主」の顕在	35
(1) 集中構造	36
(2) 音韻	36
(3) 小結論	37
2, 23 編の主題「旅の歩み」－15～24 編の構造における 23 編と律法の主題の関連 から導き出される、モーセ五書の主題との関係 ...	37
(1) 23 編における「律法」のテーマとの密接な関連構造	37
(2) 律法との関連がきっかけとなりもたらされるモーセ五書の主題	38
①出エジプト記の主題との結びつき	38
②申命記の主題と律法による命	39
(3) 小結論	40
3, 15～24 編の全体構造から見た 23 編の中心主題	41

4, 旅の目的地に帰る旅－「主の家」に「帰る」 (23 編 6 節)	41
5, 小結論.....	43
第 6 章 詩編編集の歴史的背景の考察	43
1, 書物としての詩編が生み出された過程	43
2, 編集目的の検討	44
3, 詩編編集者についての提案.....	46
4, 小結論	47
結論	48
参考資料.....	51

〈略語表〉

ATD	Das Alte Testament Deutsch
BDB	Brown, F., S. R. Driver and C. A. Briggs. <i>A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament</i> . MA: Hendrickson Publishers, 2005.
BHS	<i>Biblia Hebraica Stuttgartensia</i>
JSOT	Journal for the Study of the Old Testament
KHAT	<i>Konkordanz zum hebräischen Alten Testament</i>
NEB	Die Neue Echter Bible
OBO	Orbis Biblicus et Orientalis
TDOT	<i>Theological Dictionary of the Old Testament</i>
VTCHC	<i>Veteris Testamenti Concordantiae Hebraicae atque Chaldaicae,</i>
WBC	Word Biblical Commentary

序論

詩編 23 編（以下、書名の略は詩編を表す。）は、教会で最も愛されている詩編であると言っても過言ではない。礼拝だけでなく、教会の葬儀など様々な場面で読まれ、祈られる。また、個人の信仰を支える愛唱聖句でもある。一人一人の信仰者の、そして教会の、主への信仰告白である。また、教会を越えて様々な文学作品にも用いられるほど、この主への信頼に満ちた詩編は多くの人に愛されている。それほど多くの人に知られているこの詩編 23 編の中心主題が何かと改めて問う時に、聖書学ではさまざまな解釈がなされてきた。

従来、詩編はさまざまな場面で用いられた歌の収集体であるという先入観から、20 世紀初頭から中旬過ぎに至るまで、類型への問を中心に、テキストの元来の姿、使用状況、加筆意図など解釈がする類型論による研究が行われてきた。テキスト外の素材（祭儀などの生の座）を用いて分析する史的・批判的方法である。この類型論によると、23 編は、類型論の父である Gunkel 以降「信頼の詩編」に分類されてきたが、比喩の鮮やかさが印象的な詩であり、本詩が歌われた元来の場面である生の座については判然としないとされる。そこで、主を羊飼いとすする比喩（1～4 節）と食卓の主とする比喩（5～6 節）の関係を問う解釈がなされてきたが、このような解釈ではテキストを分割してしまい、あらゆる類推を生み、23 編の一貫したメッセージを抽出することは難しい。

その後、1940 年代後半からの死海文書の発見により、詩編各作品の並び順に新たな関心が向けられてきた。1980 年代後半からの詩編研究では正典的解釈がなされている。つまり、詩編の編集意図などを含めて詩編の全体性から見る解釈で、テキストに内在する要素（形式、構造、隠喩的機能など）を考察の対象とし、テキストの最終形態を尊重する解釈である。この正典的解釈は探求の途上にあり、23 編も視点からのこの解釈がなされるべきである。

23 編は 15～24 編の小詩編集の中に位置づけられ、その視点からの研究が大切である。15～24 編の詩編配列に着目する解釈は、Pierre Auffret（以下 Auffret と略する）¹による集中構造の発見により、その構造の意義についての議論が深められてきているが、核となる詩編（19 編）を重視する解釈では人間中心の視点からの解釈になる傾向がある。そこで、アスペクトという認識理論により、この集中構造を「枠となる詩編」と「内在的詩編」の

¹ Pierre Auffret, *Les Psaumes 15 a 24 comme ensemble structure* (Editions Universitaires- Vandenhoeck, 1982).

複層的な構造から解釈する Philip Sumpter（以下 Sumpter と略する）²の論文を中心的に紹介する。この解釈から導き出される、律法の果実である神の祝福の現実に至る上昇の旅と言う神学的考察に基本的に同意しつつ、しかし、この解釈には、15～24 編を前から順番に読む視点が十分でないことを指摘し、集中構造の複層的な視点の一つとして、15～24 編を順に直線的に読む際に、Sumpter の提示する神学的考察の底を支える「主の贖いによる死から命に至る旅」という物語的展開があることの提示を試みる。

そして、この 15～24 編の物語的展開の文脈の中で 23 編の中心主題を解釈する。本論文の提示するテーゼは「主と共に命に至る旅の歩み」が 23 編の中心主題であるということである。

本論文では、従来 of 類型論による 23 編の解釈を整理し批評を行った上で（第 2 章）、23 編を 15 編から 24 編の構造的に捉える解釈を検討する（第 3 章～第 5 章）。第一に Auffret の発見した 15～24 編の集中構造と、続く神学者による編集意図の解釈の歴史を紹介し、批評を加えた上で、Sumpter の解釈を紹介する。Sumpter は、アспектという認識方法を用い、「枠となる詩編」（15、19、24 編）について創造、律法、新しい創造という前進する物語を見出し、「内在的詩編」で実存的に深められる神の救済の摂理という神学的考察を行った。しかし、Sumpter の解釈には、「枠となる詩編」と「内在的詩編」を一貫する 15～24 編を直線的に読む物語的視点が十分でない（第 3 章）。そこで、15～24 編を構造分析により導き出される死と命のモチーフの連鎖などから、15～24 編を構造的に直線的に読む「死から命に至る旅」という物語的解釈を提示し、語彙分析により Sumpter の理論との整合性を示す（第 4 章）。さらに 15～24 編の文脈から「主と共に命に至る旅の歩み」が 23 編の中心主題であることを立証し、15～24 編の集中構造を貫く「律法」が 23 編にも密接に関連し、更にこのことがきっかけとなってモーセ五書の主題も持ち込まれることを提示する（第 5 章）。最後に、これらの考察に基づき、詩編編集意図と詩編編集者についての暫定的な見通しを提示する（6 章）。

² Philip Sumpter, "The Coherence of Psalms 15-24," in *Biblica* (vol.94, No.2, 2013), 186-209.
Philip Sumpter, *The Substance of Psalm 24, an attempt to read scripture after Brevard S. Childs* (Bloombury T&T Clark, 2015).

第1章 詩編23編の試訳と本文批評・文法上の註

1, 試訳³

1 賛歌 ダビデの詩

主は わたしの羊飼^aい、わたしに欠けなし^b。

2 草の 広々とした^c原の中に、彼は わたしを 休ませる。

安らぎの 豊かな^d水の ほとりに^e、彼は わたしを 連れて行く。

3 わたしの魂は 生き返らせられる^f。

彼は私を導く、義の 路線の中に。

彼の名の ために。

4 わたしが歩く とき できえ、

死の陰の 谷を、

わたしは恐れない^g、 悪を。

なぜなら あなたこそが わたしと共に。

あなたのむち、あなたの杖、

それらこそが 私を慰める^h。

5 あなたはセットする、わたしの顔の前に 食卓ⁱを、

わたしを縛る者の 正面で。

あなたは潤した^j、油で わたしの頭を。

わたしの杯^kは 飽和状態^l。

³ BHS の行の区切りに従う。

6 まさに、恵み^m と慈しみ が私を追ってくる。

わたしの生きている 日々の 全てにおいて。

わたしは帰るⁿだろう、主の家に。

日々の長さになたってとこしえに^o。

2, 本文批評および文法上の註

1: a רעי¹は動詞רעה²のカル型・分詞・男性単数・一人称単数（接尾辞）。直訳は「わたしを牧する者」。旧約聖書の中で、アベル（創4:2）、ヤコブ（創30:31・36、46:32・34・48:15）、ヨセフ（創37:2・12・13・16）、モーセ（出3:1）、ダビデ（サム上16:11、17:15・34・40）が羊を飼う者である。特に、モーセとダビデは、主なる神から召命を受けの際、それぞれ自らが羊を飼って養っていた（出3:1、サム上16:11）。羊を飼う者が、主によって主の民を牧する羊飼いとして召され、立たされる。23編は「ダビデの詩」であるが、以下（第5章2）で検討するように出エジプトを想起させる語彙の多用により、モーセの姿も同時に想起される。羊飼いとして立たされている、王ダビデと律法のモーセが、「わたしの牧者は主のみである」と告白する姿が重ねられる。

1: b 動詞רָקַח³（欠く、不足する）のカル型未完一人称単数。否定形で豊かさと完全さを表現する。23編で用いられる12個の動詞⁴の内10個が未完形である。この未完形は過去の状態の現在に至るまでの継続・習慣を示し、現在と更に未来をも含む非常に豊かな表現である。未だ完了していない出来事のただ中であることを表す。よって「欠けなし」とは、「思い起こせばかつて確かに欠けはなく、それは今までずっと変わらず欠けがなく、現在もそうであり、そしてこれからも欠けはないのだ。」ということである。「欠けがない」という出来事のただ中に生かされてある。揺るぎない主への信頼が表され、経験と希望を統合する表現である。これを、日本語翻訳では「欠けなし」という現在形で表現する。

2: c 牧草地は複数形であり、複数で広さを表すと解釈する。

2: d 憩い、水の複数形を水の豊かさを表すと解釈する。

⁴ ① אָחַסַר (1節、欠ける(ない))、② יָרַבִּיצַנִי (2節、休ませる)、③ יָנְהַלְנִי (同、連れてゆく)、④ יָשׁוּבָב (3節、生き返らせられる)、⑤ יִנְחַנִּי (同、導く)、⑥ אָלַךְ (4節、歩く)、⑦ אִירָא (同、恐れる)、⑧ יִנְחַמֵּנִי (同、慰める)、⑨ תַּעֲרַךְ (5節、セットする)、⑩ דִּשְׁנַת (同、潤した)、⑪ יִרְדְּפוּנִי (6節、追ってくる)、⑫ וּשְׁבַתִּי (同、帰るだろう)。完了形は⑤⑩のみ。

- 2: e 1 編 3 節参照。מִיָּם פְּלִגִּי עַל 流れのほとり（に植えられた木）。
- 3: f שׁוּב（返す）のポエル型・未完了・三人称男性単数。以下の通り 19 編 8 節（律法について述べる 8～11 節の冒頭）の「主の律法は完全で、魂を生き返らせる」と同じ語彙が意図的に使用され、19 編の律法を 23 編に関連させる。よって、本節も 19 編 8 節と同じ「生き返らせられる」と訳す。
- 4: g 詩編に 44 回使用される。主なる神（の御名、御業、裁き、御力）への畏れを意味し、否定形で用いられる場合は「わたしは（主なる神以外を）恐れませんか」という文脈で用いられ、主なる神に対する関係を表現する語彙である。本節も「わたしは主なる神以外を恐れませんか、ただ主にのみ畏れ御前にひれ伏します」という意味である。
- 4: h 4 節「慰める」（נָחַםのピエル型未完了三人称男性単数）は、BHS によると 3 節と同じ「導く」（הָדָה）と読む提案がなされている。これは「むち」と「杖」（23:4）は羊飼いが羊を導く際に使用する道具であることからの意識と考えられる。しかし、動詞変化の文法的整合性から、マソラ本文通り「慰める」と訳出する。また、15～24 編は第二イザヤの語彙が多用される特徴⁵があり、נָחַםも第二イザヤ冒頭（イザ 40:1）と強く共鳴することも根拠の一つである。この「慰める」とは、見捨てられたと打ちのめされている者を力づけ、励まして、再び立ち上がらせることである⁶。
- 5: i 直訳は「机」。BHS によるとヌンを重複誤写として「槍」と読み変える提案がなされているが、マソラ本文のとおり「机」と訳出する。「机」（23:5）⁷は幕屋建設（出 25:23・27・28・30, 26:35, 30:27, 31:8, 35:13, 37:10・14・15・16, 39:36, 40:4・22・24, レビ 24:6, 民 3:31, 4:7）における供え物のパンを捧げるための聖別された机を指し、主の御臨在と深く関わる。この机は神の箱の側に設置された。以下のように（第 3 章 2（4））、15～24 編の全体構造はサムエル記の文脈で読まれることが期待され、特に

⁵ 第二イザヤと 15～24 編に使用される共通の語彙・モチーフは以下の通り。「慰める」（נָחַם）（イザ 40:1、詩 23:4）の他に、羊飼いの導き及び養い（イザ 40:11, 23:1）、創造と秩序の比喩の共通性（イザ 40:12～31、15-24 編の全体構造）、「声」（イザ 40:3・6・9、詩 18:7・19:4）、「道」（דָּרַךְ）（イザ 40:3、詩 18:22・31・33）、「道」（נָחַם）（イザ 40:14、詩 16:11, 17:4, 19:5）、「谷」（イザ 40:4, 23:4）、「栄光」（イザ 40:5、詩 19:2, 24:7・8・9・10）、「とこしえ」（עוֹלָם）（イザ 40:8、詩 15:5, 18:51, 21:5, 24:9）、「山に登る」（הָרַ / הָרָה）（イザ 40:9、詩 24:3）、「恐れるな」（אַךְ）（イザ 40:9、詩 23:4）、「来る（主が来られる）」（בּוֹא）（イザ 40:10、詩 24:7・9、Cf: 100:2）、「歩く」（הָלַךְ）（イザ 40:31、詩 15:2, 23:4）等。

⁶ 大住雄一、「詩編 23 編」、『アレテア：聖書から説教へ』15(1995): 53-58。

⁷ 名詞שֻׁלְחָןは 71 回用いられる。モーセにおいては、幕屋建設の指示、準備、命令の箇所、幕屋の中に設置される供え物のパンを捧げるための聖別された机を指す。祭儀と関連する（出 25:23・27・28・30, 26:35, 30:27, 31:8, 35:13, 37:10・14・15・16, 39:36, 40:4・22・24, レビ 24:6, 民 3:31, 4:7）。これに対して、ダビデは、神殿建築の宣言においては、モーセと同様に、供え物のパンを捧げる聖卓を指すが（歴上 28:16）、祭儀とは直接は関係のない食卓の席での食卓を指す使用例の方が多く（サム上 20:29・34, サム下 9:7・10・11・13, 19:29）、ダビデ王の最期に食卓に連なる者として印象的に用いられる（サム下 9:7）。

サムエル記下 6 章の神の箱のエルサレム移設を想起させる重要なモチーフである。

5:j 完了形 (1:b 参照)。日本語訳は「潤した」と過去形で訳する。

5:k 5 節「わたしの杯」。七十人訳聖書では「あなたの杯」となり、「あなたの溢れんばかりの杯で、あなたは私の頭に油を注ぐ」という解釈になる。しかしマソラ本文通り「わたしの杯」と訳す。5:1 のとおり「わたしの杯は過剰 (直訳)」は名詞文であり、文法上、油を注ぐことと区別した強調表現が用いられているからである。敵の面前でさえあなたは私の顔の前に食卓を備えてくださり、わたしの頭に油を注ぎ、さらにわたしの杯をも満たしてくださる、と言う解釈である。

5:l 名詞文。満ち溢れる程の、身に余る程のという意味の力強い表現である。

6:m 七十人訳聖書では、6 節最初の二語「まさに、恵み (אֶרְחָם)」を 5 節最後に繋げて解釈するが、マソラ本文通り 6 節の「慈しみ」と継続 I で結合し (TOU)、**「恵みと慈しみ」と読む**。四語目の動詞 יִרְחֵם (カル型未完了・三人称複数) の主語は三人称複数形で、これは「恵みと慈しみ」といういずれも単数形の名詞二つを合わせて指し示していると考えられ、文法上の整合性がある。

6:n וּשְׁבַתִּי は、「帰る」(שׁוּבのカル型・接続 I を伴う完了 (意味は未完了)・一人称単数) と、「住む」(שָׁב;カル型・接続 W を伴う完了 (意味は未完了)・一人称単数) の二通りが考えられる。マソラ本文は「帰る」である。以下で論証する様に、15~24 編の全体構造から導き出される物語的展開の中で 23 編の中心主題を考察した結果、「帰る」を選択し、日本語としては未来形の表現「帰るだろう」と訳出する。詳細は、第五章 4「旅の目的に帰る旅-「主の家」に「帰る」(23 編 6 節)」参照。

6:o 直訳は、日々の長さ。第 4 章 1 (2) ①参照。

第2章 詩編23編単体の解釈より導き出される中心主題と批判的考察

23編の中心主題の探究を始めるに際し、従来の類型論による23編の解釈を整理する。23編単体に着目した解釈とそこから導き出される中心主題を整理し、批判的考察を行う。

1. 類型論による解釈

詩編の類型論は、詩編を内容により、嘆き（嘆願、告訴等）と賛美（賛歌、感謝等）に分類し、生の座から具体的な歴史的背景を導き出すことにより詩編成立時の特定の背景の中で詩編を読むことを試みるものである。

23編は「嘆きの歌」の中の「個人の信頼の歌」に分類されるが、歴史的背景を特定する要素に欠け、生の座は判然としないときれ⁸、一つの詩編類型にあってはまらないとする説もある⁹。その中で、歴史批評的な解釈の多くは、1～4節の主を羊飼いと捉える比喩、及び、5～6節の主を食卓の主人とする比喩の二つの比喩から構成されていると捉え、そのいずれに重点を置くか、もしくはその結合を試みるかによって、異なる解釈が導き出されてきた。

(1) 羊飼いの比喩を重視する解釈

まず冒頭の1～4節に表される羊飼いの比喩に重点を置く解釈を紹介する。

Mays¹⁰は、信頼の個人的側面の強調し、一人の人格に注がれる羊飼いの心遣いへの集中に焦点を当てる。また、Shmidt¹¹は、父祖の旅の伝承から巡礼を読み解く。石川¹²も、羊飼いの比喩を重視し、捕囚期に捕囚の地にあるイスラエルが抱く「誰がイスラエルを捕囚の地から帰還させるか」と言う問い対して、ヤハウエこそがイスラエルを導き帰還させる主であるとする。Craigie/Tate¹³も羊飼いの比喩を重視し、23編は出エジプト、荒野の旅の連想するもので、例えば、「欠けることがない」(23:1)は出エジプトの間神が民を養ってくださった(申2:7)ことを、「青草の原」(23:2)は聖なる牧草地(出15:13)を、「導く」は出エジプトの導きを(出15:18)、「憩い」(23:2)での荒野での「安息の地」「平穩」(民

⁸ 月本昭男、『詩編の思想と信仰Ⅰ 第1篇から第25篇まで』、(新教出版社, 2003), 333-336.

関根正雄、『関根正雄著作集第10巻 詩篇註解(上)』、(新地書房, 1980), 181-184.

勝村弘也、『詩編註解リーフ・バイブル・コンメンタリーシリーズ』、(日本基督教団宣教委員会, 1992), 298.

⁹ クラウス・ヴェスターマン、『詩篇選訳』、(教文館, 2006), 182-184.

¹⁰ J.L. メイズ、『現代聖書注解 詩編』、(日本キリスト教団出版局, 2000), 189-195.

¹¹ N. Shmidt, *Die Psalmen*, (Tubingen, 1934), 40.

ここでの要約は石川立「ヤハウエはとわに！詩編23編の一解釈」, 2.を参照した。

¹² 石川立, 「ヤハウエはとわに！詩編23編の一解釈」, 『日本の聖書学』4(1998):1-25.

¹³ Craigie, Peter C., and Marvin E. Tate, *Psalms 1-50 (second edition)*, WBC (Zondervan, 2004), 204-205.

10:88) を想起し、また「御名のために」は 106 編 8 節でエジプトからの解放の文脈で用いられることを指摘する。出エジプト伝承に重きを置く解釈を展開する。

この様に、羊飼いの比喻を重視する解釈は、イスラエルの民をエジプトから導き出し、荒れ野を旅して約束の地に導いた出エジプト伝承の背景を重視する。

(2) 食卓の主の比喻を重視する解釈

次に、5・6 節の食卓の主の比喻を重視する解釈は、敵の前で食卓を整えられる主の元に避難し、命を守られるとするという所に力点を置く。

例えば、Schottroff¹⁴ は、エルサレム神殿での神名裁判の無罪判決の言い渡しを求めて緊急避難し、庇護を得た状態についての詩であると解釈する。G. von Rad¹⁵ は、レビ人が精神的避難所である聖所で内的な充実感を持って祭儀に参加している姿を歌う者と解釈し、E. Vogt¹⁶ は生の座を神殿祭儀としての犠牲の食事と解釈する。この様に、食卓の主に比喻に重点を置く解釈は、生の座を神殿で行われる何らかの儀式・裁判に置き、そこに庇護されると言う静的なイメージを伴う。

(3) 結合型・一貫型の解釈

23 編の一貫性を重視し、いずれかの比喻を重視するのではなく、両比喻の結合を試みる解釈もある。Merrill¹⁷ は、王が関係した神殿での祭儀であるとして、王の即位式を正の座とする儀式行為であると解釈し、Spieckemann¹⁸ は詩編 23 編は神学的議論の場であるとして、神殿神学「神-王」ビジョンが示されているとする。更に E. Zenger¹⁹ は、社会的レベルにおける神学・政治学的論争に生の座を置き、敬虔な人々のグループの一員と敵との論争であるとする。この様に結合型は神殿に重おき多く解釈が導かれる。

その他、23 編の一貫性を重視する解釈として、23 編は一貫して羊飼いの比喻のみであるとする解釈もある。例えば、自らの羊飼いの経験に基づき、羊飼いのもとの羊が大切に命を守られ、生かされ、養われる具体的な描写に基づく解釈を行う Keller²⁰ は 1~6 節通して羊飼いのイメージを貫き、5~6 節は夏の高地への季節移動を表していると解釈する。Terrien²¹ も、羊飼いの

¹⁴ 勝村、『詩編注解リーフ・バイブル・コンメンタリーシリーズ』, 299-307.

¹⁵ 石川立, 「ヤハウエはとわに!」, 2.

¹⁶ 同上書。

¹⁷ 同上書、2-3 頁。

¹⁸ 同上書、3 頁。

¹⁹ 同上書、3-4 頁。

²⁰ W. フィリップ・ケラー, 『羊飼いが見た詩篇 23 篇』, 舟喜順一(訳), (いのちのことば社, 1979), 124-173.

²¹ Samuel Terrien, *Psalms and Their meaning for today* (The Bobbs-merrill company, 1952), 228-238.

Samuel Terrien, *The Psalms Strophic Structure and Theological Commentary* (Eedmans, 2003), 236-243.

のイメージの継続による解釈を行う。主への「信頼」が 23 編を貫くテーマであり、喜び・平安に溢れており、一貫した羊飼いの象徴は、神の 4 つの側面（① 牧者である神(1b～3a 節)、② 導き手である神 (3b～4 節)、③ 癒し主である神様 (5 節)、④ 宿主である神 (6 節)) を表しているとする。

2, 批判的考察

類型論に基づく解釈を考察するに、まず前述の様に生の座の特定が困難である所に類型論で 23 編を解釈する限界がある。生の座を問うことは正当であるが、23 編を読むとき、特定が困難な生の座を類推した解釈（二つの比喻からの生の座の類推）をせざるを得なくなり、特に一貫したメッセージを検討する際には議論の類推の度を増し、新しい類型、新しい生の座を作り出し、演繹的な議論となる難しさがある。

また、類型論に基づき導き出されるそれぞれの主題は重要であるが、15～24 編の全体構造からの読む時には、この旅や命や神殿という主題がより広い文脈の中に置かれる。23 編単体で読むだけでは、やはりこの意味の視点には十分には至らない。このように類型論による読みではまだ捉えきれていない意味の文脈が残る。

第 3 章 詩編 15～24 編の解釈史・批判的考察と Philip Sumpter の中心主題

そこで、15～24 編の全体構造から、その文脈の中に置かれる 23 編の中心主題を検討する。ここでは Auffret による 15～24 編の集中構造の発見及びその解釈の歴史を概観し、批判的考察を行った上で、Sumpter の論文を中心的に紹介する。

1, 詩編 15～24 編の集中構造とメッセージ

(1) Pierre Auffret による集中構造の発見

詩編五巻からなる構造を持ち²²23 編は第一巻 (1～41 編) に属するが、更にその中に 15～24 編に大きな集中構造を見出し、高度に構造化された自己完結的な構造を有する小詩編集としての一連の流れを発見したのが、フランスの構造主義者の Pierre Auffret (1982) ²³である。

Auffret は、15～24 編の詩の主題的対称性を特定し、以下のような配列があることを

²² 第一巻が 1～41 編、第二巻が 42～72 編、第三巻が 73～89 編、第四巻が 90～106 編、第五巻が 107～150 編とされ、それぞれの巻の終わりに頌栄句がある。

²³ Auffret, *Les Psaumes 15 a 24 comme ensemble structure*.

発見した。

- A 15 (入祭の典礼)
- B 16 (信頼の歌)
- C 17 (助けを求める祈り)
- D 18 (王家の詩編)
- E 19 (創造・律法の詩編)
- D' 20-21 (王家の詩編)
- C' 22 (助けを求める祈り)
- B' 23 (信頼の歌)
- A' 24 (入祭の典礼)

このように 15～24 編は 19 編を中心とした同心円状の構造を有し、中心である 19 編の両側に他の詩編がペアで並列的に配置され、ABCDEA'B'C'D' という集中構造を形成する。なお Auffret はこの構造を発見したが、その機能について特定の解釈を提示していない。²⁴

(2) 集中構造の機能から導き出されるメッセージ

後の研究も Auffret の発見した集中構造を基礎に発展し、その機能やメッセージについての考察が行われてきた。

① Frank Lothar Hossfeld and Erich Zenger (1993)

Hossfeld / Zenger²⁵は、第一巻は 3～14 編、15～24 編、25～34 編、35～41 編の 4 グループに区分され、それぞれ中心に置かれた詩編が構造の鍵となるとする。

そして、詩編 15～24 編の配列の鍵となる中心に置かれた詩編は 19 編であり、15～24 編は全体で共同体のアイデンティティ構築の意図があるとする。貧者と呼ばれるグループの人々が捕囚前の王の詩編 (18、20・21 編) を中核に据えてダビデに帰属させて民主化し、1 人のダビデ王の姿を真のイスラエル共同体の型に変化させ、ダビデのアイデンティティを自分たちに適用して、苦しみに直面する中 (17、22 編) でも、かつてダビデに与えられた救いを体験するのだということを暗示する機能を持つとする。

²⁴ Sumpter, "The Coherence of Psalms 15-24," 190.

²⁵ Hossfeld, F.-L.-Zenger, E., *Psalmen I* (NEB), (Echer Verlag, 1993), 12.
ここでの要約は Sumpter, "The Coherence of Psalms 15-24," 187. に依拠する。

② Patrick Miller(1994)

Miller²⁷は、ダビデの理想化と民主化が詩編の主要なモチーフであり、ダビデは他の人々の見習うべき「模範」として掲げられているという。15～24編は、イスラエルの模範となる人物であるダビデの信仰の戦いの「祈りの構造」であるとされ、具体的には、「理論」の詩編（15、19、24編）が実行（16～18編、20～23編）に移される構造であるとする。

③ William Brown(2010)

これまで紹介した解釈は19編を中心とした求心的な解釈を試みるのに対し、Brown²⁸は反対に遠心的な読み方を提案する。中心である律法をテーマとする19編から外に向かって読む読み方を提案した。

④ 飯謙（2006）

飯謙²⁹は、詩編は紀元前2世紀から後1世紀頃に、「脱神殿」と呼ばれる立場から編纂されたとの作業仮説を立てる。第1ダビデ詩編（3～41編）は、「神殿に対する観想の集成」であり、伝統的な神殿教義に対して「弱者」と「義」の問題が提起され（3～14編）、義が能動的から受動的へ、また王から弱者へと移行され、全ての者が神殿に招かれる宣言がなされ（15～24編）、応報思想に順応しない「脱神殿」が表され神殿のイメージが後退する（25～34編）。そして「大いなる集会」（詩35:18、40:10・11）が神殿やその論理から自由になる場であり、主は弱さに学ぶ者を救い「地」で支えるという、脱神殿モチーフが一層鮮明にされる（35～41編）。

15～24編の分析においては、19編が著者の自作でありその周りに15～18編と20～24編を配置したとの作業仮説により、15編と24編は入場、16編と23編は信頼、17編と22編は嘆き、18編と20・21編は王についての交差配列が見られるとする³⁰。

（3）批判的考察

続いて、上記の15～24編の小詩編集の機能、メッセージに対する批判的考察を行う。

²⁶ Sumpter, "The Coherence of Psalms 15-24," 187.

²⁷ Patrick Miller, "Kingship, Torah Obedience, and Prayer: The Theology of Psalms 15-24", *Neue Wege der Psalmenforschung*. Festschrift für Walter Beyerlin (eds, K. Seybold-E. Zenger) (Freiburg im Br., 1994): 127-142. ここでの要約は Sumpter, "The Coherence of Psalms 15-24," 188. に依拠する。

²⁸ Ibid., 189.

²⁹ 飯謙, 『旧約詩編の文献学的研究 第一ダビデ詩編を中心として』, (新教出版社, 2006), 219-222.

³⁰ 同上書, 43-49頁。

なお、Hossfeld / Zenger、Miller、Brown については、Sumpter が行う以下の批判的考察に賛同する。

Sumpter は、Hossfeld / Zenger の仮説は、アイデンティティ構築という特定の理論での一方的な人間中心の解釈であるとする。しかし、15～24 編の小詩編集は、神中心（神の方法と意志）に関心がある詩編である。

Miller に対しては、提示される「祈りの構造」は、例えば 16～18 編と 20～23 編の並行性などが反映されていないなど、構造が厳密に反映されていないという指摘がなされる。また、律法と王権を強調するあまり、創造と神殿のテーマや終末論的視点が取り上げられていないとされる。更に、王の過度の民主化は、王の贖罪的機能を正当に評価していない（20～21 編）とされる。

また、Brown の読みに対しては、直線的な次元が無視され、神殿の意義が相対化されてしまうと言う。ダビデと律法のテーマを、シオンの神殿の中心に向かう動きに関連付ける必要性があるとする。³¹

また、飯謙の脱神殿の論証に対しては、人間が詩編を自分自身を考察する手段、物差しとする点は、Sumpter の Hossfeld / Zenger の仮説に対する批評と同じように、人間中心の解釈ではないかと考える。確かに、神殿に詣でることの不可能な者も、礼拝に与かるのと同じ恵みが与えられるようにするという編集目的があるとも考えられる。しかし、詩編が神殿神学に疑問を抱く者の「脱神殿」の抵抗の書であり、編集者の中心的意図がそこにあるとすれば、それが正典に入れられ、教会で祈り続けられるだろうか。神礼拝、神への賛美が第一の唯一の目的ではないのかと考えられる。詩編も神からの啓示である。

（４）小結論

この様に、15～24 編に発見された集中構造に基づき、それを一連の小作品集として、集中構造の機能に着目する解釈は、詩編単体で読むことから得られる意義を更に深め、より広い文脈に置くが、核となる 19 編に重点を置く解釈では 15～24 編の集中構造からのメッセージが、人間中心の解釈となる傾向がある。また、中心的詩編に解釈の権威を置いてそれ以外の全ての詩編の意味を変えろという集中構造の読みは、他の詩編の持つ意味を薄める課題がある。

³¹ Sumpter, "The Coherence of Psalms 15-24," 190.

2, Philip Sumpter の複層的な視点から捉えた 15～24 編の中心主題

そこで、集中構造を複層的に捉え、神中心の前進的な解釈を導いた Sumpter の論文を紹介する。本論文では、Sumpter の神中心の神学的構造理解に賛成し、更に、これと対話しつつ複層的な解釈の一つとして物語的展開を加える考察を行う（第 4 章参照）ため、Sumpter の 15～24 編の集中構造に対する解釈を詳細に紹介する。

(1) アスペクトという知覚理論

Sumpter は、アスペクトという知覚理論を用いた集中構造分析を行う。これは、対称的な次元と直線的な次元とを複数の視点から同時的に見る認識様式で、個々の部分の累積的な結合により全体構造が与えられ、全体を対照的な知覚の連続として捉える前進的理解を提示する。この認識は、表面的な空間的描写では不可能な、より存在に即した方法で人や物を描き出す。時間的に連続した一つの現実が描かれている一方で、連続的展開ではない主題の強まりによって前進する。この複層的な視点は、聖書記者ら古代世界の視点で、現代の単一で包括的な統一的立場から把握するのとは異なる認識様式である。³²

このアスペクトの認識様式により、中心的詩編の解釈に権威を置くのではない直線的な読みが提唱され、15～24 編の各詩編は集中構造の並列の中で拡大され、前進するものと解釈される。

(2) 「枠となる詩編」(15・19・24 編) による神学的主題の提示

まず、「枠となる詩編」(15・19・24 編) のアスペクトによる分析において提示される神学的考察を要約する。³³

① 「枠となる詩編」の構造³⁴

Sumpter によると、15～24 編の小詩編集において外枠となる 15 編と 24 編とにより終末論的物語が提示されており、核となる 19 編が二つの外枠を補完し繋げるといふ。つまり、外枠と核となる詩編から構成される「枠となる詩編」にも前進する動きがあり、解釈的な意味があるとする。³⁵

15 編は、入り口の「律法」の詩編である。誰が主の聖域内に現実にアクセスできるのか(1 節)という問に続き、「律法」(2 節～5 節)が示される。「律法」は神殿(15:5 三

³² Sumpter, *The Substance of Psalm 24*, 187.

³³ *Ibid.*, 191.

³⁴ *Ibid.*, 196-200.

³⁵ Sumpter, "The Coherence of Psalms 15-24," 189-193.

行、24:1・2) へのアクセス手段である。神殿は、神の意志が啓示される特別な場所で、歴史的・終末的・比喩的に成就と命の場所である。

次に、24 編は「律法」に加え「創造」と「創造の完成」がある。冒頭で神の「創造」が語られ(1~2 節)、その神が「創造を完成」させて民と共に住むための神殿に入城する(7~10 節)が、その方法が「律法」(3~6 節)である。ヤコブのシオンへの入場(3~6 節)³⁶と主の神殿入城(7~10 節)³⁷の並置により、創造の完成を描く終末論的物語が提示される。

この様に、24 編は 15 編を宇宙論的・終末論的な神学的文脈に位置づけたものであり、15 編と 24 編の枠により神の救済の摂理と言う神学的な枠が提示される。正しい個人が生命の場に入ることは、神が同じ場所に入る一部であり、それは創造が完成する瞬間として理解される。また、ダビデの類型化(個人と共同体の相関)という神学的展開も示され、24 編は、15 編で個人に焦点を当てた識別を集団に適用するクライマックスである。15 編の個人としてのダビデ王に対する神の答えは、24 編で全イスラエルに当てはまるものとされ、ダビデ像がイスラエルの正しいアイデンティティの典型例になる。

更にこの 15・24 編の外枠と密接に関連し、繋げ、補完するのが、集中構造の核とされ並行詩編を有しない 19 編である。19 編は「創造」と「律法」の詩編である。Sumpter によると、19 編と 15・24 編を統合するテーマは「律法」(8~11 節)だが、19 編では神殿ではなく「創造」(1~7 節)が言及される。それは、「創造」の地平で「律法」の意義を黙想し、天地創造以来、天体の絶え間ない軌道に現れている時間の流れを支える秩序の継続を、生命を与える律法の中に見出すことで、神の意志に従うこと、つまり律法遵守が神の臨在への接近を可能にすることを明らかにする。こうして、人を宇宙の構造そのものと一致させる。そのことに気付かさ、更にその律法に従う助けを主に求める詩編である。³⁸

② 「枠となる詩編」のから提示される神学的主題

Sumpter の「枠となる詩編」の理論をまとめると、以下のようになる。

³⁶ Sumpter によると預言書では、捕囚の民の帰還の目的地がシオン/エルサレム(イザヤ書)である。

³⁷ モーセ五書の P 文書(祭司資料。紀元前 550 年頃バビロン捕囚後に成立。)においては、安息日と幕屋建設が創造のクライマックス(出 31:16-17)であり、そこに神が民と共に住むことが創造の意味である。

³⁸ Sumpter, *The Substance of Psalm 24*, 204-207.

15 編：律法	【B】
19 編：創造（1～7 節）＋律法（8～15 節）	【A/B'】
24 編：創造（1～2 節）＋律法（3～6 節）＋ヤハウエの神殿への到来（7～10 節）	【A'/B'/C】

19 編と外枠となる詩編 15、24 編を直線的な順序で互いに関連して読むと、15 編は「入り口の律法」(B)、19 編は「創造」(A) と「律法」(B')、そして 24 編は「創造」(A') と「入り口の律法」(B') と「到着・完成」(C) という構造と前進する動きが見られる。

15 編の全体を構成する「質問-解答-約束」(B) の構造は、24 編の真ん中にミニチュアとして見られる (B')。この構造の共通の関心は、律法それ自体ではなく、律法への従順が約束するもの、即ち祝福、即ち神殿の門の奥に見いだされる現実である。つまり、15 編、24 編は、律法への従順による果実である、祝福、神殿の奥に見いだされる現実に至る、上昇の旅である。

まず 15 編で「誰が命の充足に近づくことができるのか」という質問が提起され、その答えが、神への従順（神の律法に従うこと）である。そして、第二に 19 編において、神への従順の行為は「創造」の全体的な秩序の一部であるとみなされ、宇宙的な意義を与えられ、最後に 24 編において、律法に従う者を神殿の扉の向こうで新しい創造という完全な運命に導くのは神ご自身であるということが示される。つまり、15 編で示された質問と、19 編で示された神の意志の実現が 24 編で示される。

この「枠となる詩編」の焦点は神中心の神の現実へと導く機能にある。神の現実が先立ってあり、神の現実を把握しそれに照らしてイスラエルのあるべき姿になるよう望む、と言う順番が示される。Sumpter はこのような神中心的解釈を提示する。神が王として、民を、神殿を越えた現実へと導く創造の御業の完成という終末論的物語が神学的主題である。

（3）「内部的詩編」による神学的考察の実存的な深まり

Sumpter によると、「枠となる詩編」の間に並列する「内部的詩編」は、人間の深みへ移行する生きた歴史が語られる実存的詩編であり、「枠となる詩編」で示される神学的考察を実存的に深めるとされる。また、「内部的詩編」は並列関係の中で、後の詩編は先の詩編を更に拡大、前進させるものとして直線的に読むことができるとする。

① 16/ 23 編³⁹

Sumpter は、16 編と 23 編は「信頼の歌」であり、共通テーマは主への信頼と臨在の喜びであるとする。主の御前に生きる喜びの肯定（16:11、23:6）は、15 編 1 節で望まれ、同 5 節で従順な者に約束され、24 編 7～10 節でその完成の入り口に立つとされるもので、15・19・24 編の神学的構造を反映するより広範な神学的な物語へ 16・23 編を位置づける。

23 編と 16 編の並列関係における神学的主題の深化は、第一に「静」から「動」への移行にある。16 編は土地に限定されており、ダビデと神の関係は神の臨在の中に「住む」という静的なイメージであるが、23 編は、神の臨在される「主の家」（6 節）という目標に向かって旅をするという動的なものに深められている。現在の苦境（4 節）を経た後、将来に到着する神の臨在を目指す旅である。これは 15 編と 24 編の間にも、「誰が住むか」（15:1）から「誰が登るか」（24:3）という変化と共通する。23 編は、16 編で味わう祝福された神体験の希望を、より広い救済史的地平に埋め込み、24 編の神の臨在への到着のイメージへの道を準備するものである。第二に、16 編は王個人の歌であるが、23 編はダビデを真のイスラエル人の型に当てはめ、イスラエル全体の経験を一個人に再現したものとされることにより、イスラエル全体の歌となる。このように 23 編は 16 編の神学的考察が強められ、より広い視野へと変化していることが分かる。

② 17/ 22 編⁴⁰

Sumpter によると、17 編と 22 編は共に「個人の嘆き」である。17 編は呼びかけ、無実の証明、請願、苦言、激励という典型的な嘆きの詩編の構造であるのに対し、22 編は、苦情、請願、称賛、感謝、賛美の約束、来るべき将来の告知という異質なジャンルからなる複合構成となるところに、神学的主題の強度と視野の広がりがある。22 編において、嘆きは信頼の肯定（22 編 4～6 節、同 10～11 節）の循環に組み込まれ、最後には終末論的な讚美で締めくくられる。22 編では「低く」始まり「高く」終わり、その讚美の領域は神の国であり、24 編における神の臨在に一步近づくものである。

③ 18/ 20・21 編⁴¹

Sumpter によると、18 編及び 20・21 編は救いに関する「王の詩編」である。両者の違いとその実存的な深まりは、18 編では王の救いは、王自身のためのものであるが、20・21

³⁹ Sumpter, "The Coherence of Psalms 15-24," 200-202.

⁴⁰ Ibid., 202-203.

⁴¹ Ibid., 203-204.

編では、王の救いは自分自身だけではなく、共同体のためのものであると位置づけられる所にある。20・21編では、王と民の運命が織り込まれ、民は王に依存し、王は民に依存する。この明示的な織り込みは、個人の救済をより広い神学的文脈で肯定することになる。これは下記のサムエル記と同様であり、サムエル記もダビデ王は、究極的には神の民の救済の為の手段であり、神が動きを主導する者である。

(4) サムエル記の文脈から導かれる神の媒体としてのダビデ

最後に、Sumpter は「ダビデの詩」という表題はサムエル記の文脈で読むことを期待するもので、「王と律法」と「創造とシオン」の2つの概念が、主がダビデを主の主権の中での神の媒体として用いられるという、真の神学的文脈にダビデを位置付けるという。

① 表題「TIT7 (ダビデの詩)」の意味

従来、「ダビデの詩」という表題は、詩編編者によるダビデ化を趣旨とする後代の付加と考えられてきた⁴²。しかし、Sumpter は、サムエル記の文脈で読まれることを示唆するものであるとする。⁴³ダビデのプロフィールは神の救いの計画を意味する。律法が神の救いの現実に至る手段であると同様に、ダビデもイスラエルの人たちがシオンに昇るための媒体、つまりイスラエルの贖罪のための神の媒体であると考えられている。ダビデは単なるロールモデル（いわゆる「ダビデ化」）ではない。⁴⁴

② サムエル記のダビデ⁴⁵

多くの研究は、サムエル記は長所・短所を併せ持つ現実的なダビデによる歴史的因果関係の連鎖の出来事だと見るが、Sumpter は超歴史的な別次元があるという。

サムエル記を意図的に縁どっているハンナの詩（サム上2章）とダビデの詩（サム下22章。詩編18編）は、間の現実的な物語の性質を解釈する神学的な全体像を示す機能があり、この枠によりサムエル記の行為主体はすべて「神」であることが示される。歴史的因果関係がダビデに働いていると見える部分も全て、世界の創造者・審判者である神の王としての行動である。歴史の展開はすべて「神の意志」に基づき、混沌に対して神が王権的

⁴² ダビデ化（ダビデという人物の上書き）の意味について従来の見解は次のようなものである。Zenger は「竖琴奏者」であるという聖書の伝統（サム上16:14-23、同18:10）を反映させるとし、また Goldingay は前置詞7について6つの英訳の可能性（①to, ②belonging to, ③for, ④on behalf of, ⑤about, ⑥by）を提示し、Kileer は歴史上の人物ダビデから、来るべきダビデ（エレ30:9、エゼ34:23-24、同37:24-25、ホセア3:5）へとその意味が歴史と共に変化したとし、更に、Rendtorff は、歴史上のダビデと詩編132編のダビデ王朝の象徴としてのダビデの相互作用の存在に着目した。Sumpter, "The Coherence of Psalms 15-24," 165.

⁴³ サムエル記はダビデ初登場の場面で才能ある音楽家として描き、彼の人生を詩編で要約し（サム下22章、18編）、死ぬ前の言葉として詩を暗唱させる（サム下23章）。

⁴⁴ Sumpter, *The Substance of Psalm 24*, 170-171.

⁴⁵ Ibid., 171-173.

な主権を決定的に押しつける。また、ダビデの成功の鍵は知恵（サム下 23 章）と律法への従順さ（サム下 22:21～32）によって解読されることにより、ダビデの歴史は主自身の計画に基づく宇宙的な規模での神の歴史に包含されている事が示されるとする。⁴⁶

Sumpter によると、サムエル記の中心は、神が行為主体として前面に出る下 5～8 章にある。ダビデがエルサレムを占領（5 章）し、神の箱を都に移送し（6 章）、ナタン預言がなされ（7 章）、ダビデの勝利（8 章）が語られる祝福のクライマックスである。特に 6 章はダビデの歴史を形作る決定的な要素である。また、8 章のダビデの勝利は年代的にはバト・シェバ事件以降（下 9～20 章の間）だが、主の勝利の主題の中に置かれており、主の約束は単純な時の経過を凌駕し、ダビデの歴史は神の歴史の布の中にある一糸であるという解釈が示される。⁴⁷

③ 神のイスラエルの贖罪の媒体としてのダビデ⁴⁸

ダビデは自由意志で主の意志に服従し主の助けにより勝利を得たが、それは同時に、ダビデを通して実現される主ご自身の計画と言う宇宙的歴史の動きでもあった。理想化されたダビデは、主が求めるパートナーでありメシアの希望の基準ともなる。

ダビデの選出は、主とイスラエルとの間の契約に利益をもたらす手段に過ぎず、このことをダビデは自認している。ダビデは、イスラエルが安息を得るためイスラエルの人たちが神ご自身の安息に入るためにシオンに昇る手段・媒体である。

（５）小結論

以上をまとめると、Sumpter は、アスペクトという知覚理論を用いて集中構造を分析し、詩編 15～24 編は、神学的テーマ（15・19・24 編）と実存的状況（16～18 編・20～23 編）を、イスラエルの終末論の伝統を反映したより広い神学的地平に発展させるという一貫した動きがあるとする。サムエル記の文脈で読むことで神の意志が際立ち、神の意志（律法）に従うことは、単に命の充足へのアクセスを与えるだけではなく、創造の完成のための主の計画に参画することなのであることが示される。⁴⁹

（６）批評

Sumpter の集中構造を核となる詩編に集中させるのではなく、構造自体を直線的に読み「枠となる詩編」で物語の枠を示し、その内容が「内部的詩編」の並列により実存的に深

⁴⁶ Sumpter, *The Substance of Psalm 24*, 174.

⁴⁷ Ibid., 174-176.

⁴⁸ Ibid., 182-183.

⁴⁹ Ibid., 207.

められ、それにより、神殿の奥の現実、神の臨在に至る旅と言う終末論的物語が提示されるということは、神中心の読みであると捉えられる。神の現実が先だっており、その神の現実に神の秩序により導き入れられることが、律法・創造により示され、その中を実存的に行かされるという読みは、正典としての聖書の意義に合致すると考えられる。人間中心ではなく、神中心であることが際立つ解釈である。

しかし、Sumpter には、15～24 編を配列のとおり前から順番に読むという視点が十分には論じられていない。特に内在的詩編の並列的な考察に加え、配列順に読む視点を加えて読むことにより、「枠となる詩編」と「内在的詩編」を一貫して配列順に読むと、Sumpter の提示する神殿の奥の現実へと至る旅が、主による罪の贖いにより「死から命に至る旅」であるという具体的な内容が深められ、神学的意義が更に複層的に深められると考える。

第 4 章 詩編 15～24 編の物語的展開－Philip Sumpter との対話

ここでは Sumpter の考察を基盤とし、15～24 編の構造分析及び語彙分析により、15～24 編を順に読むことで得られる物語的解釈を考察する。これにより集中構造に物語的展開の新たな視点を加えるとともに、両者の整合性のある解釈を試みる。

1, 詩編 15～24 編の物語的解釈の紹介及び批判的考察

第一に方法論として、15～24 編を配列順に構造的に読む解釈を紹介する。初めに、詩編配列に意味を見出し、鍵語の連鎖により順番に読む意義を主張する Lohfink を紹介し、続いて、具体的に 15～24 編の詩編配列の物語的意味を検討した大住雄一を紹介する。大住は、小作品集についてそれぞれの詩文自体の意味を深く吟味した上で、15～24 編は起承転結を有する一連の物語であると言う。

(1) Lohfink⁵⁰

Lohfink は、黙想の視点から詩編配列に意味を見出す。Lohfink は、類型論による生の座は我々とかけ離れており、詩編で祈るためには詩編を一つの書物として扱う必要があるとして、その配列に着目する。主イエス時代に既に詩編は朗誦すべき黙想のテキストとして使用されていたからである。

⁵⁰ N.ローフィンク、「詩編理解にとっての最終編集の意義」, 計良祐時・清水宏(共訳), 『主のすべてにより人は生きる』, (リトン,1992), 63-82.

詩編には、内容的・言語上の連鎖がある。この連鎖は、鍵言葉、動機、部分的內容、大まかな呼びかけと応答などにより生み出される。連鎖が詩の相互浸透をうみ、類型論では別類型とされた詩にも結合と連鎖が見られるようになり、詩の並列によって新しい主題が設定され意味変化が起こる。

このように、Lohfink は詩編を一つの書物として扱い、その詩編配列にも編集上の意味があることを主張する。Lohfink は 15～24 編も配列上の意味があり、配列順に読む解釈が可能であることを支持するものである。

(2) 大住雄一⁵¹

大住は具体的に 15～24 編の配列に 1 つの物語的展開を論証する。大住は、15～24 編は起承転結で物語を捉えることができるとする。「起」(15～17 編)では、「義」(15:2、17:1・5)が枠構造を作り、「揺るがない」(15:5、16:8、17:5)が各詩編で繰り返される。続く「承」(18～21 編)では、「義」(18:21・25、19:10)を喜び、「揺らぐことがない」(21:8)という確信が歌われ、「転」にあたる 22～23 編で、礼拝からの隔絶を意識(22:2)される中で、「救ってください」の嘆願(22:22。20:6・21:2・6を彷彿)がなされ、「主に栄光を帰せよ」信頼の告白(22:24。24:7-10に繋がる)へと展開してゆく。その 23 編 4 節において突然二人称で主に呼びかける全幅の信頼が 15～24 編全体の決定的転換点であり、主にすべてを委ねると言う信仰の飛躍という劇的展開がある。そして「結」(24 編)で、義が救いの神から来ることの告白(24:5)がなされ、栄光の王と共に礼拝に入城(24:7-10)する。

(3) 批判的考察

このように Lohfink や大住により、15～24 編を配列順に読む物語的展開という解釈が可能であることが根拠づけられる。Lohfink のように、正典としての詩編を一冊の書物として捉え、配列それ自体に着目してダイナミズムの中で読むことには、教会的な意義があると考えられる。確かに、類型論による生の座は、個々の詩編の成立当時の背景から詩の意味を深く味わうことができるが、上記の様に類推が進む可能性も高く、また導き出された生の座も、後の読み手である教会からは時間的・場所的・文化的に程遠く、実存的な読みから遠ざけてしまう可能性があるし、23 編においてはそもそも生の座が確定できない。しかし、詩編は正典として継承され、教会で読み祈られ続けられてきた⁵²。

⁵¹ 大住雄一『「詩編研究」への補遺—アルファベートうたをめぐる—』、大野恵正・大島力・大住雄一・小友聡(編)『果てなき探究 旧約聖書の深みへ—左近淑記念論文集』所収、(教文館, 2002), 199-201.

⁵² 体験的なことであるが、出身教会の日本基督教団西宮一麦教会では、教会設立当初より旧新約聖書を通しての一日一章の聖書通読が教会の聖書日課として継続されており、近年は週一回の祈禱会も一日一章の聖書箇所をみなが

さらに、15～24 編において具体的な詩編配列の意味を論じたのが大住である。大住は起承転結において決定的な「転」の部分に当たる詩編が 23 編であることも、23 編の中心的主題の探究においては非常に魅力的である。しかし、起承転結という文章構造は、中国の漢詩で用いられる構成方法であり、漢詩の原型は周（紀元前 1046 年頃～256 年）の時代に出来たものであり、詩編への影響を考えるのは困難であろう。詩編には先に上げたアスペクトの観点が必要である。また、15～24 編を順に読む物語的展開は、集中構造についてのアスペクトの複層的な視点の一つであると考えられ、Sumpter の理論と対立するのではなく、相互に補完するものであると考える。集中構造に加えて、15～24 編の順番の配列にも意味を見出すことで、複層的に小詩編集の意味が深められるからである。よって、大住の 15～24 編の物語的展開には、集中構造を反映しないところに弱点があると考えられる。

2, Sumpter の神学的考察を基盤とする物語的展開「死から命に至る旅」

そこで、Sumpter のアスペクトの観点からの集中構造についての神学的考察を基盤とし、その複層的な読み方の一つとして、15～24 編に関係するモチーフの連鎖の分析や語彙分析を行い、Lohfink や大住の視点に基づく 15～24 編を順に読み進める物語的展開の解釈を試みる。

これにより、Sumpter によって「創造・律法・創造の完成」の枠と実存的な神学の深まりによって提示される「主の祝福の現実に至る上昇の旅」というテーマが、更に 15～24 編を配列順に読み進める時に、主の贖いによる「死から命に至る旅」という物語展開として具体的に神学的考察に深みを与えることの立証を試みる。

(1) 「死から命に至る旅」の物語を示すモチーフの連鎖

① 「死」と「命」に直接関連する語彙によるモチーフの連鎖

15～24 編には死と命を表す単語が多く用いられる。死を表すものは、**מוֹת** (死 17:14, 18:5, 18:6, 22:16)、**שָׂוֹל** (陰府 16:10, 18:6)、**שַׁחַת** (墓穴 16:10)、**לִיעֵל** (奈落 18:5) である。また、命を表すものは、**חַיִּי** (命 16:11, 17:14, 18:47, 21:5, 22:27, 22:30)、**נַפְשׁ** (魂 16:10, 17:9, 17:13, 19:8, 22:22, 22:30, 23:3) である⁵³。

聴き、黙想し、分かち合いをして教会の祈りをお献げすることが続けられている。その中で、詩編はただ様々な詩が寄せ集められたものではなく、1 編「幸いなるかな」から 150 編「ハレルヤ」に至るダイナミズムな文脈があることを意識させられてきた。教会での共同黙想において、このように前から順に読まれていく機会があることを考えるに、意図された配列により語られる物語にも重要な意味があると考えられる。

⁵³ なお、**נִחַם** (息、風) は、15～24 編では神の怒りや裁きの文脈で用いられる (18:11・16・43)。これは、死や滅びから命に至る神の贖いの前提となる罪への気付きを与える (19:12-14) ものである。この意味で、**רוּחַ** は死と

命：נפש חיי

死：ליעל שחת שאול מות

B 16:10 כי לא-תעזב נפשי לשאול לא-תתן חסידך לראות שחת

あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく

/あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず

16:11 תודיעני ארח חיים

命の道を教えてくださいます。

C 17:9 איבי בנפש יקיפו עלי :

貪欲な敵が私を包囲しています。(直訳：魂の私の敵どもが私を取り囲む。)

17:13 פלטה נפשי מרשע חרבך :

あなたの剣をもって逆らう者を撃ち/わたしの魂を助け出してください。

17:14 ממתים ידך יהוה ממתים מחלד חלקם בחיים

主よ、御手を持って彼らを絶ち、この世から絶ち /

命ある者の中から彼らの分を絶ってください。

D 18:5 אפפוני חבלי-מות ונחלי בליעל יבעתוני :

死の縄がからみつき/奈落の激流がわたしをおののかせ

18:6 חבלי שאול סבבוני קדמוני מוקשי מות :

陰府の縄がめぐり/死の網が仕掛けられている。

18:47 תִּיהוה

主は命の神。

E 19:8 תורת יהוה תמימה משיבת נפש

主の律法は完全で、魂を生き返らせ

D' 21:5 חיים שאל ממך נתתה לו ארך ימים עולם ועד :

願いを聞き入れて命を得させ/生涯の日々を世々限りなく加えられた。

C' 22:16 ולעפר-מות תשפתני :

あなたはわたしを塵と死の中に打ち捨てられる。

22:21 הַצִּילָה מִחֶרֶב נַפְשִׁי מִיַּד־כְּלָב יַחֲדִיתִי:

わたしの魂を剣から救い出し/わたしの身を犬どもから救い出してください。

22:27 יְחִי לְבַבְכֶם לְעַד:

いつまでも健やかな命が与えられますように。

22:30 אֲכַלּוּ וַיִּשְׁתַּחֲוּוּ כָל־דְּשֵׁנֵי־אָרֶץ לִפְנֵי יַכְרְעוּ כָל־יֹרְדֵי עֵפֶר וּנְפֹשׁוֹ לֹא

תִּיבָה:

命に溢れてこの地に住む者はことごとく/主にひれ伏し/

塵に下った者もすべて御前に身を屈めます。/わたしの魂は命を得、

(直訳: 地の全ての肥えた者たちは食べてひれ伏す。塵に下った者はすべて彼の面前に屈む。そして彼の魂を主は生かしていない。)

ⓑ 23:3 נַפְשִׁי יִשׁוּב

魂を生き返らせてくださる。

23:4 גַּם כִּי־אֶלֶךְ בְּגֵיא צְלָמוֹת לֹא־אֶירָא רָע:

死の陰の谷を行くときも/わたしは災いを恐れない。

23:6 אֶךְ טוֹב וְחֹסֵד יִרְדְּפוּנִי כָל־יְמֵי חַיִּי

命ある限り/恵みと慈しみはいつも私を追う。

ⓐ 24:4 נְקִי כַפָּיִם וְבֵר־לֵב אֲשֶׁר לֹא־נִשְׂא לְשׂוֹא נַפְשִׁי וְלֹא נִשְׁבַּע לְמַרְמָה:

それは、潔白な手と清い心を持つ人。/むなしいものに魂を奪われることなく欺くものによって誓うことをしない人。

構造分析をすると、「命」を表す「魂 (נפש)」は8回 (B 16:10、C 17:9・13、E 19:8、C' 22:22・30、B' 23:3、A' 24:4) 用いられ、集中構造と「信頼の歌 BB'+助けを求める祈り CC' (各二回) +核となる詩編 E→外枠詩編 A'」という動きを併せ持つ構造に配置されている。また5回用いられる「命 (חַיִּי)」(B16:11、C17:14、D18:47、C'22:27・30、B'23:6) も、「B・C・D・C'・B'」という綺麗な集中構造の配置を有する。更に「死」を表す表現は「陰府」「墓穴」「奈落」語彙を変え、または音の響きと不規則変化による暗喩のような表現 (17:14、23:4) をも用いて各詩編を死のモチーフで繋ぐ。

この「生」と「死」を表す語彙が Lohfink のいう各詩編を結ぶ特徴的な共通のモチーフとなり、15~24 編を余韻を残しつつ連想的に読む1つの物語的な展開を与える。各

詩編を個別に読んだ時にはあまり重視されないテーマが、モチーフの連鎖により浮かび上がってくる。

では、どのような物語的展開が示されるのか。

例えばψψを分析するに、上記の動きを有する集中構造「BB'+CC'+E→外枠A'」(B 16:10、C 17:9・13、E 19:8、C' 22:22・30、B' 23:3、A' 24:4)を配列順に読む時、物語の前半(BC)では、自らの正しさを主に訴えることで魂の救済を得ようとする⁵⁴が、真に魂に命を与える主の律法の前で悔い改めて主の贖いを求め(E)、後半では(C'B')主に魂を生き返らされた希望の内に全幅の信頼をもって主と共に歩み⁵⁵、遂に主によって「魂を奪われることのない⁵⁶」人に変えられて、主と共に入城するのである(A')。

このように、15～24編を直線的に読むと「死から命に至る旅」という物語的展開が浮かび上がる。主の贖いによって魂の救済を得、死から命へと変えられて、主と共に旅を続け、まことの命、創造の完成である神殿の奥に見いだされる主の祝福の現実、天の国に遂に至る物語である。

更に、「死」の意味から、この物語的展開は Sumpter の 15～24 編の集中構造の分析より導き出される神の摂理と共振することが示される。TDOT によると、動詞 **מָוַת** は派生語が多く、その一つである **מָוַת** は旧約聖書の中で 150 回用いられ、特にシェオール(イザ 28:15)等とパラレルに使用され⁵⁷、「死の領域」の呼称としても用いられ⁵⁸、空間(門、部屋)や、混沌としたと恐ろしい状態(波、奔流、縄、罨、武器)を表す。⁵⁹すると、死の支配領域は混沌・無秩序で、神と断絶させようとするものであるのに対し、命の支配は秩序である。

よって、「死から命に至る旅」における命とは、神の秩序に取り戻され、神との関係の中に生かされることである。創造主であり全能であられる主のご支配、御心、御言

⁵⁴ 16・17編では、私があなたを避けどころとし讃えるので(16:1・7)、あなたは「魂」を陰府に渡すことはずがないと主に訴え(B)、敵に包囲される状況においても自らの正しさを主に訴え出て公平な裁きを求める(C)。

⁵⁵ 主の律法こそが完全で「魂」を生き返らせるものであるとの気づきを与えられ(19:8)、創造主であられる主の主権を知らされて、主に立ち帰り、主に自らの罪の贖いを求め(E)贖われた者は、剣の危機の中でも「魂」の救いを主に求め、魂が救いを得ることに希望を見出しつつ歩み(C')、魂の生き返らされた(23:3)ことの全幅の信頼をもって主と共に歩む(B')。

⁵⁶ 「魂を奪われることなく」という表現は、死(魂を奪われる)と命(魂を奪われることなく)を包含するもの。

⁵⁷ K. J. Illman, H. J. Fabry and H. Ringgren. “**מָוַת**.” In *TDOT* vol. 8 (Eerdmans, 1983-1984), 190-191.

⁵⁸ 「死の門」(9:14; 107:18; ヨブ 38:17)、「死の波」「死の縄」「死の罨」(サム下 22:5、詩 18:5、116:3、箴 13:14、14:27)。特に 18 編は「死の縄、奈落(ベリアル)の奔流、シェオール、死の罨」がある。

⁵⁹ *Ibid.*, 205-206.

葉、摂理、ご計画の中で生かされることが命である。死からの救済が、集中構造の中心である 19 編において行われる主の贖いである。また、その死から命に至る転換となるが、主が与えくださる命の「律法」である。主の律法こそが魂をよみがえらせると言う気付きは、同時に、律法遵守を妨げる自らの罪の悔い改めに導かれ、主に贖いを求めるのである。

その贖いを受け命の支配に入れられた者は、この世の秩序がないと思われるような無秩序・不条理が支配すると考えられる死の領域がすぐそばに存在する「死の陰の谷」(23:4) からも救い出されて旅を続け、遂に「主の家に帰」り (23:6)、「とこしえの門に入る」(24:7-10) のである。

②「揺るがない (מוט לא /ל) 」と「死 (מות) の否定」のメタファー

更に、15～24 編は「揺るがない (מוט לא /ל) 」という表現と揺るがない堅固なもののイメージの積み重ねにより、「死 (מות) 」を否定するメタファーが積み重ねられ、死から命に至る旅のモチーフの連鎖を生み出している。

詩編第一巻は「揺るがない」という表現が繰り返し用いられる特徴があり、15～24 編の中でも 4 度同じ表現が繰り返される (15:5, 16:8, 17:5, 21:7)。いずれも動詞 **מוט** (揺れる、揺らぐ) の否定形 (מוט לא /ל) ⁶⁰である。

この動詞の語根は、死という名詞 **מות** と三根字目が異なるだけで、耳で聞いた時に非常に似た音として聞き取られる。動詞「揺れる」の三根字目のテート **ו** の音価は“t”であり、名詞「死」の三根字目のタウ **ת** の音価も“t”“θ”である⁶¹。ヒブル語の発音は、唇音、歯擦音、歯音・舌音、口蓋音、喉員の五つに分類されるが、**ו** も **ת** も同じ歯音・舌音である⁶²。よって、「揺るがない」というロー・モート、及び、バル・モートという表現は、詩文として、暗に「死」を否定している表現ではないかと考えられる。

このように「揺るがない」が「死の否定」の表現であるとする、15～24 編の中で用いられる、揺るがない堅固なもの、固い防御、敵の攻撃から守るもの⁶³は、死を否定するイメージとして用いられていると考えられる。これらはいずれも主なる神を讃える表現である。18 章 47 節では、主は「岩」であり、「主は命の神」「わたしの救いの

⁶⁰ ロー (15:5) /バル (16:8, 17:5, 21:7)。

⁶¹ 本間敏雄 (増補), 『ヒブル語入門改訂増補版』, (教文館, 2011), 28-29.

⁶² 同上書, 55 頁。

⁶³ 「避け所」(16:1)、「わたしの砦」「わたしの大岩」「避けどころ」「わたしの盾」「救いの角」「岩の塔」(18:2)、「我らの岩」(同 32)、「救いの盾」(同 36)、「わたしの岩」(18:47, 19:15)。

神」であると告白される。よってこれらを総合して検討すると、「堅固で揺れ動かないもの」は、死を否定する「命」であると結論付けられる。

これらの揺るがないもの、命に対して、死は「死の縄」、「奈落の激流」、「陰府の縄」、「死の網」(18:5) という揺らぐものとして描かれ、この揺らぐものが捕らえようとしてくる誘惑や試練を彷彿とさせる。

構造的に分析すると、揺るがないもの(死を否定する命)のモチーフは、15～24編の集中構造の前半部分(16～18編)に集中的に用いられる。後半の20～24編では、これらの揺るがないものは、第一に「聖所」「主の家」という目的地・場所として描かれ⁶⁴、また、第二に防御が「もの」から「(神が用いられる)ひと」へとイメージ転換⁶⁵が行われている。

以上をまとめると、15～24編で繰り返される「揺るがない(מֹט לֹא/בַל)」という表現は「死(מוֹת)」を否定する「命」のメタファーであり、15～24編の前半ではそれがさまざまな堅固なものの比喻で配置され、後半ではそれが場所や人へのイメージ転換が行われて実際に命に導き上げられると言う、「死から命に至る旅」が描かれているとすることができる。

(2) 物語を補完する語彙の連鎖及び Sumpter の理論との整合性

以上で提示された15～24編の「死から命に至る旅」という物語的展開を更に補完し、深める語彙やモチーフの連鎖の分析を行う。①「とこしえ」の連鎖は、上記の物語的展開を神の摂理の中に置き、Sumpterの理論との整合性を示す。②「義」の言葉の連鎖は、私の義から神の義への転換と律法との関係を提示する。③「道」と「完全」は旅の道程と目的地を、④「清さ」と「完遂」とは「死から命に至る旅」を主の贖いと救いの完成へ導く。

これらの語彙により、「死から命に至る旅」が神の摂理の中にあり、この旅が神の義と律法と贖いと救いにより、神の主権による神の出来事として進められることが明らかにされる。更に Sumpter の理論との整合性も同時に指摘し、集中構造の中で物語的展開が豊かに響くことを示す。

①とこしえ

第一に、「死から命に至る旅」が神の摂理の中にあることを示す語として、15～24編

⁶⁴ 「聖所」「シオン」(20:3)、「聖なる天」(同7)、「聖所」(22:4)、「集会」(同23)、「大いなる集会」(同26)、「御もと」(同28)、「主の家」(23:6)、「主の山」「聖所」(24:3節)、「城門」(24:7・9)。

⁶⁵ 「王」(20:10, 21:2・3・6・8, 24:7・8・9・10)、「私の神よ」(22:2)、「羊飼い」(23:1)。

の中には「とこしえ」を表すモチーフが積み重ねられる。これは「死から命に至る旅」という物語的展開を神の摂理・秩序の中に位置づける語彙の連鎖として、物語的展開をさらに深め、また Sumpter の理論との整合性を示すものである。

具体的には以下のとおりである。

- ① לא ימוט לעולם (15:5) とこしえに揺らぐことはないでしょう。
- ② נעמות בימיך נצח (16:11) 右の御手から永遠の喜びをいただきます。
- ③ עד-עולם (18:51) とこしえに
- ④ יראת יהוה טהורה עומדת לעד (19:10) 主への畏れは清く、いつまでも続き
- ⑤ ארך ימים עולם ועד (21:5) 生涯の日々を世々限りなく加えられた。
- ⑥ כי-תשיתו ברכות לעד (21:7) 永遠の祝福を授け
- ⑦ יחי לבבכם לעד (22:27) いつまでも健やかな命が与えられますように。
(直訳：あなたがたの心が永遠に生きるように)
- ⑧ לארך ימים (23:6) 日々の長さにわたってとこしえに。(試訳)
- ⑨ ושאו פתחי עולם (24:9) とこしえの門よ、身を起こせ。

この中で、①③⑧はそれぞれの詩編の最終節のことばである。

J.アブリ⁶⁶によると、ヘブライ語で「とこしえ」を表す三つ語彙 (עולם、עד、נצח) は、いずれも「神のとき」を表す。“עולם”は「常にある」と言う限界が認められないか存在しないときを、“עד”は非常に離れた所に限界を考えたときを、“נצח”は全ての限界を超越したときを表す。よって、15～24編で用いられる「とこしえ」を表すときの表現は、神の秩序(律法、創造から導き出される神のご支配)を表す、「神のとき」であるということができる。

これに対して、「人間のとき」を表す単語は別にあり、現代のように客観的に計られた時間ではなく、人間が体験した具体的な出来事・内容を有し、神の支配・働きによって初めて時となるものである⁶⁷。人間の時は、神の時との関係において「自分たちが今、神の中にある」ときに初めて時となるのである。そうすると、23編4節「あなたがそばが私と共に」(23編4節。 כי-אתה עמדי) は、「とこしえ」を表す上記3つの言葉は用いられていない23編において、人のときが「神のとき」となることをはっきり

⁶⁶ アブリ. J., 『創造と救い』, (エンデルレ書店, 1963).

⁶⁷ 同上書, 10頁。

と告白しているもので、上記の様に 23 編の集中構造の中心で神の臨在が「とこしえ」をも意味すると言える。

この様な「神のとき」を表す「とこしえ」に関する表現は、神の秩序・神の摂理を想起させ、15～24 編の物語的展開が常に神の秩序の中にあることを意味する。これは、「律法」を「創造」に関連付け、宇宙的規模での「創造の完成」という神の臨在へ入城という終末論的物語、及びサムエル記の神主権の主題と共鳴する表現である。

②「義」

15～24 編の中で **צדק** (義) という名詞は「正しいこと、正しさ」として 6 回用いられる (15:2、17:1・15、18:21、同 25、23:3)。これを 15～24 編の構造における物語的展開の文脈で分析すると、前半 (15～18 編) では「わたしの正しさ」、つまり律法遵守する自らの正しさを神に訴える場合に用いられる⁶⁸が、19 編で上記の様な主の律法の前に転換がなされ⁶⁹、主の贖いを経た後は、「正しい (道)」(23:3) という「神の正しさ」へと転換がなされる。「主が、主の正しい道にわたしを導かれる」の意で用いられるのが特徴的である。こうして律法による神の秩序の回復がなされ、後半は神の秩序にある「神の正しい道」を主が共に導き上げてくださる信頼を、主との関係の中で歌う。

小友⁷⁰によると、**צדק**は「法」を意味する語彙である。旧約聖書における「法」は、法律のみならず社会秩序や制度、共同体的規範も含まれる。律法は、救済と刑罰を定めて調和の回復を図るための関係概念であり、調和、つまり神の秩序の回復の機能が「義」に含意される。

また「義」を 15～24 編の全体構造の文脈で見ると、個人が祝福を受ける手段 (15 編) から、宇宙とイスラエルに対する神の救済の摂理において不可欠な要素へと広げられていること (24 編) も、Sumpter の集中構造と共鳴する物語の深まりである。

③「道」と「完全」

15～24 編の中で「死から命に至る旅」を表す重要な単語として「道」という語彙が挙げられる。日本語で「道」と訳されているものは「小道 (**אֶרֶץ**)」(16:11、17:4、19:6)、「道 (**דֶּרֶךְ**)」(18:22・31・33)、「足跡・路線・塹壕 (**מַעְגָּל**)」(17:5、23:3) という三

⁶⁸ 15:2「正しいこと」、17:1「正しい (訴え)」、同 15「正しさ」、18:21「正しさ」、同 25「正しさ」。

⁶⁹ 義を鍵語として 15～24 編の全体構造の物語的展開を読み進めるときに、前半では律法遵守の正しさを神に訴えるが、19 編で主の律法と創造の秩序が関連付けられて示され (19:2-5)、主の律法こそが魂をよみがえらせるものである事 (同 8-11) と、それは自らの力ではできず死に至る事を知らされて (同 12-14)、主の正しさにより魂の命に至る贖いを求める (同 15) 転換がなされる。

⁷⁰ 小友聡、『旧約聖書と教会』,(教文館, 2021), 133.

つのヒブル語が用いられているが、これらの道は、15～24編を構造的に読むときに、「完全な」という形容詞 **תָּמִים** と共に補い合いながら用いられるところに特徴がある。

- 15:2 **הוֹלֵךְ תָּמִים** 完全（新共同訳は「道」を意識で補う）を歩く者
- 16:11 **תוֹדִיעֵנִי אֲרַח חַיִּים** あなたはわたしに命の小道を知らす
- 17:4 **אֲנִי שֹׁמְרֵי אֲרָחוֹת פְּרִיץ** 暴虐な者の小道を避けて、
- 17:5 **תִּמְךָ אֲשֶׁרִי בַמַּעְגָּלוֹתֶיךָ** あなたの路線の中わたしの歩みを支えてください
- 18:22 **כִּי-שֹׁמְרֵי דַרְכֵי יְהוָה** なぜなら、私は主の道を守る
- 18:31 **אֵל תָּמִים דְּרָכּוֹ** 神の道は完全
- 18:33 **וַיִּתֵּן תָּמִים דְּרָכֵי** 神は…わたしの道を完全にし
- 19:14 **אֲז אֵיתָם וְנִקִּיתִי מִפֶּשַׁע רַב** そうすれば多くの背きの罪から清められ
私は完全になるでしょう
- 23:3 **נִחְנִי בַמַּעְגָּלִי-צַדִּיק לְמַעַן שְׁמוֹ** 主は私を御名のために義の路線に導き

このように、道（死から命に至る旅）が完全（創造の完成、天の国）に至るといふ物語が15～24編を順に読んでいくときに現れ出る。15～24編において主の律法を守って生かされる歩みが「道」である。そして、律法の目的である調和の回復が「完全」であり、目指すべき創造の完成である。ここに Sumpter の神学的考察との響きがあり、相互に補完するものであると言える。

道に関する語彙の物語的転換点も、神の道を完全にするのは人間の努力によっては不可能で、罪の清めが必要であるという気付き（19:14）である。後半の贖いの後に用いられる道である「路線・足跡・塹壕（**מַעְגָּל**）」（23:3）は、主が共にいて歩んでくださる主の路線・足跡に主が導いてくださるという意味である。また塹壕は敵から身を守り戦うための道であり、主が死に勝利して下さり贖ってくださった命の道へと、主が主ご自身の御名のために、主にある正しさ（義）の道へと主が導いてくださるのである。死から命に至る旅の物語が神の摂理の中で進められて行く。

④「清さ（純粹さ/罪の清め）」と「完遂」

更に、「死から命に至る旅」といふ物語的展開の中で、上記③「道」と「完全」を更に深める展開として、律法の完全（目的の完遂）のためには罪の清めが必要であることも、

15～24 編を順に読んでいくときに発展する物語として提示される。

ここで日本語で「清い」と表現されるものは、形容詞 **בָּר** (18:21、同 25、同 27、24:4 清い、純粋な) と動詞 **נָקָה** (19:13、同 14。清くする) 及び語根が同じ形容詞 **נָקִי** (15:5、24:4。清い、無罪、空の) という二つのヒブル語である。一つ目の **בָּר** は純粋さや清さを表し、二つ目の **נָקָה** と **נָקִי** は無罪であること、罪が空にされる清さ、罪からの清めを意味する。この二つの単語が 15～24 編の中では以下のように配置されている。

15:5	וּשְׁחַד עַל־נֶקִי	<u>無罪の人</u> (無実の人) を陥れない人
18:21	כִּבֵּר יְדֵי יֹשִׁיב לִי	わたしの手の <u>清さ</u> に応じて
18:25	כִּבֵּר יְדֵי לִנְגַד עֵינָיו	彼の目 (御目) に対するわたしの手の <u>清さ</u> に応じ
て		
18:27	עַם־נֹבֵר תִּתְבַּר	<u>清い人</u> には <u>清く</u>
19:13	שְׂגִיאוֹת מִי־יָבִין מִנְּסֻתְרוֹת נֶקִי	(知らない罪、隠れた罪から) わたしを <u>清めて</u> ください
19:14	אִז אֵיתֶם וְנִקִּיתִי מִפְּשַׁע רַב	そうすれば重い罪から <u>清められ</u> 、 完遂するでしょう
24:4	נֶקִי כַפַּיִם וְבַר־לֵבָב אֲשֶׁר	それは <u>潔白な手</u> と <u>清い心</u> を持つ者

これを前から順に読むと、物語の初めに主の臨在に至る条件 (律法) として「無罪の人 (を陥れない人)」が提示された (15:5) 後、物語の前半は「わたしの」清さを主が見てそれに応じてくださる事を求めるが、19 編で罪の気づきによる罪から解放されて無罪とされる清めを主に求めることに転換され、その罪からの解放こそが死から命に至る旅の完遂に必要なものであることに気付かされ、そして贖いを求める。その後、物語の最後には、主の贖いによって無罪とされたという「潔白な」手とそこから神によって与えられる主に對する「清い心」を持つ者へと変えられて、主の神殿の奥にある種の祝福の現実へと主と共に導き上られる旅が完遂へと向かうと言う一連の物語が提示される。

罪への気づきと、その罪からの清めが 19 編で創造と律法の提示によって気付かされるところに、Sumpter の枠となる詩編の神学的考察との深い関わりの中でこの物語が展開されている事が分かる。

(3) 15～24 編の物語的展開の提示「死から命に至る旅」

以上の考察から導かれる 15～24 編の直線的な読みによって示される物語的展開をまとめると、自らの正しさを主に訴える者が、魂をよみがえらせる主の律法を前にして自らの罪に気付かされ、律法遵守することができず死に至る自分を知り、主に贖いを求め、主の贖いにより魂がよみがえらせられて、主と共に旅を続け、遂に主の祝福の現実に至るという「死から命に至る旅」である。この物語的展開の大きな転換点は 19 編 15 節の主による贖いがあり、これにより、15 編では律法を誰も守ることができないとされる（14 編からの文脈より）から、24 編で主なる神と共に主の祝福に入る者へと変えられるのである。

この物語的展開は、Sumpter の集中構造分析において提示される神学的考察に、より深く、より広い、根源的な意味を与えるものである。また、神の摂理の中に置かれている事を表す語彙の分析等を行うことにより、「死から命に至る旅」の物語は、Sumpter の集中構造の理論と切り離されず、むしろそれを基盤とし更に深める、整合性を有する見解であると言える。

(4) 小結論

このように、15～24 編を配列順に読むとき、主の贖いによる「死から命に至る旅」という神学的主題が、Sumpter の集中構造から導き出される考察と強く共鳴して浮かび上がる。これは、Sumpter の提示する神学的主題をさらに具体的に深める、集中構造の中での複層的な視点の一つを付加するものであると考える。

第 5 章 15～24 編の物語的展開から見た 23 編の中心主題

－「主と共に命に至る旅の歩み」

それでは 15～24 編を集中構造に基づいて配列順に読んだ時に得られた「死から命に至る旅」という物語的展開の中で、23 編の中心主題はどのように捉えられるか。23 編の構造分析及び語彙分析を行い、23 編のより根源的なテーマは「主と共に命に至る旅の歩み」であると結論付ける。ここでは、第一に「主と共に」という主題を、続いて「旅の歩み」という主題を分析し、その後「主と共に命に至る旅の歩み」という 23 編の中心主題全体の考察と、そこから帰結される 6 節「帰る/住む」の具体的な解釈を紹介する。

1, 23 編の主題「主と共に」－構造分析等による「主」の顕在

23 編の第一の主題である「主と共に」という主の臨在は、23 編の構造分析により明ら

かにされる。「主 (יהוה' アドナイ)」が外枠を囲み、中心におられ、23 編全体が主の御臨在の中に置かれている。そして、その主が「死から命に至る旅」に伴ってくださることに全てをお委ねする信仰告白が 23 編の中心主題の一つの重要な要素であることを立証する。

(1) 集中構造

23 編の構造を分析すると、第一に「主 (アドナイ)」による囲い込みの構造が明らかになる。2 回のみ用いられる「主」という単語は、初めの行 (1 節) と終わりの行 (6 節) のみ用いられ、主の御名を呼んで始まり、主の御名を呼んで終わるといのように意識的に配置され、詩の枠組みを構成する。

更に、23 編の構造の中心に「あなた」(23:4) と二人称で呼びかけられる主がおられる。月本⁷¹は、23 編は集中構造を有し、その中心はヘブライ語三語の名詞文による強調文「あなたが共に」(4 節 3 行) にあるとする⁷²。また、大住⁷³も、主の人称変化 (月本と同じ 4 節 第 3 行) に着目⁷⁴し、同行を中心に 23 編は前に 26 語 (23:1~4 第 2 行。但し表題を除く)、後に 26 語 (23:4 第 4 行~6 節) が配置されており、更にこの 26 という数字は主を表し⁷⁵、加えて「あなたが私と共にいてくださる」という名詞文 (4 節 3 行) の更に中央が「あなた」と呼びかけられる主でおられるとする。月本と大住の考察により、23 編の中心に主ご自身がおられることが明らかにされる。

この様に、23 編の枠構造と集中構造から「主」ご自身の御臨在が明らかにされる。主の現実の中にある、主ご自身が生きて働いておられるという主の顕在は、死から命に至る旅の後半の大切な中心主題である。その「主」ご自身が、旅についても「共にいてくださる」から恐れぬという、主のみに全幅の信頼を寄せる信仰告白である。

(2) 音韻

更に「主」の顕在は詩の前半の音韻からも明らかである。BHS に従うと、主の人称が三

⁷¹ 月本, 『詩篇の思想と信仰 I』, 327-338.

⁷² 月本は、23 編は一貫して主と私の関係を歌うもので、主の人称変化 (三人称 (1-3 節) から二人称 (4-5 節) に変化し最後に三人称 (6 節) に戻る) に着目し、A 全幅の信頼 (1 節 2・3 行)、B 確かな導き (2-3 節)、C 不安の克服 (4 節 1-2 行)、D 「あなたが共に」(4 節 3 行)、C' 安心の告白 (4 節 4-5 行)、B' 豊かな祝福 (5 節)、A' 全幅の信頼という対称的構造があるとする。月本 p 333-335.

⁷³ 大住雄一, 「詩編 23 編」, 『アレテイア: 聖書から説教へ』 15(1995): 53-58.

⁷⁴ 23 編の中心である 4 節において、主に対する人称が「あなた」(二人称) に変化する。小友によると、旧約聖書は「我と汝」の永遠の出会いがあるという。「汝」の呼びかけに応答する時に初めて「我」が認識され、汝 (神) は、人間が全存在をもって語りかける人格的存在である。「一・二人称的世界」を基盤とした強烈な宗教性を示す。旧約聖書において、神は、個人ではなく共同体と契約締結された。契約主体は神と共同体 (民) である。神はまず共同体と契約締結し、その共同体において個人が意味づけされるのである。この契約共同体を形成するのが「法」である。それは、十戒の序言 (出 20:2) にあるとおり救済の歴史性を有するものである。それを絶えず想起し保持する契約共同体である。小友聡, 『旧約聖書と教会』, 140-147.

⁷⁵ YHWH(10+5+6+5=26)

人称である 1 節～4 節 2 行までの前半の冒頭の言葉は、יהוה (23:1)、על-מי (23:2)、ינחני (23:3)、כי גם (23:4) であり、いずれも「ア…イ」の音韻を踏む。これは冒頭の「アドナイ」と同じ音韻である。つまり前半の行は全て「ア…イ」の音で始まる。

このような冒頭の音韻という詩の響きをももって、23 編に聴く者に「主」のご臨在を彷彿とさせる表現の工夫がなされている。前半の主の人称が三人称の部分も、このように主との強い結びつきが響いているのである。

(3) 小結論

このような 23 編の構造の分析から、第一に「主と共に」が中心主題であると言える。

なお、BHS の改行に従った試訳を見てわかる通り、BHS の改行は節ごとになされていないが、これは集中構造の 23 編 4 節 3 行が中心に配置し、「アドナイ」の響きを冒頭に配置することで、23 編における主の臨在を強調する意図があると考えられる。

2, 23 編の主題「旅の歩み」-15～24 編の構造における 23 編と律法の主題の関連から導き出される、モーセ五書の主題との関係

次に「旅の歩み」という 23 編の中心主題について検討する。23 編は構造的に 15～24 編の律法の主題と密接に関連し、この律法との関連がきっかけとなって、出エジプト記や申命記と言ったモーセ五書の主題との関係が生み出された旅の歩みが物語られる。

(1) 23 編における「律法」のテーマとの密接な関連構造

15～24 編の構造の中で 23 編を読むとき、19 編と共通の表現「魂を生き返らせ」(23:3、19:8) が意識的に用いられることにより、19 編の「律法」と強く結びつけられる。この 19 編との繋がりによってもたらされる「律法」の響きにより、15～24 編の構造で読むとき、更に 23 編は 18 編 17～25 節の「律法」についての箇所とも響き合う⁷⁶事に気付かされ、「憩い」(23:2) という語彙も契約の箱の安置等の「律法」と深く関連する⁷⁷こと

⁷⁶ 18 編の律法に関する箇所 (18:17-25) の①人称、②語彙、③共通モチーフが 23 編と響き合う関係にある。①人称が一人称単数に変化する。18:17-25 で計 28 回繰り返される「イー」という接尾辞の響きは、23 編で計 17 回用いられる一人称と共通する響きを持つ。つまり、18 編 17-25 節と 23 編の前節に用いられている「イー」という一人称単数の接尾辞が、両者を共振させる。②18 編と 23 編も全節に共通する語彙は、例えば、23 編において命と旅と言う重要なモチーフで用いられる動詞である שוב (23:3「魂を生き返らせて」23:6「主の家に帰り」) が、18:21 で用いられる (「返して」)。また、「支え」(18:19。「わたしの支え」משען 語根 (משען)) と「杖」(23:4。「あなたの杖」מִשְׁעֵנְךָ 語根 (משען)) も同じ語根をもつ派生語である。③共通モチーフには「敵」(18:18:אֵיבָא / 23:5:צָרָר 的分詞) や「広い所」(18:20:למרחב 語根 (מרחב) / 23:1:בְּאוֹתָיִם 語根 (נָאָה) の複数形。広さの表現と解釈) がある。

⁷⁷ 「留まる」(מנוחות 語根 (מנוח)) (23:2) は、KHAT(829 頁)によると旧約聖書内で 22 回、「憩い、安らぎ、休息」と言う「留まる」イメージで用いられる。契約の箱の安置に特徴的に用いられ、その場所である神殿と関連して用いられる。具体的には、契約の箱の安置に関しては、モーセはシナイ山を出発し契約の箱の「休息地」を探し (民 10:33)、ダビデは主の契約の箱を「安置する」神殿建築宣言をし (歴代上 28:2)、ソロモンは神殿完成の祝福の

に気付かされる。

23 編は単体で読んだ場合には見受けられないこの「律法」のテーマは Sumpter の神学的考察の枠（15・19・24 編）を貫く主題でもあり、確かに 23 編も神の秩序の中で導かれる「死から命に至る旅」の過程にあるという、15～24 編の構造的な読みからのみ 23 編に与える広い視点を与える。

（2）律法との関連がきっかけとなりもたらされるモーセ五書の主題

上述の 19 編から与えられる「律法」との関連がきっかけとなり、23 編に出エジプト記や申命記と言ったモーセ五書の主題・物語との結びつきが生み出される。

①出エジプト記の主題との結びつき

確かに出エジプトの主題は 23 編を単体で読む解釈からも導かれる（第 2 章 1(1) 参照）が、上記の様に 15～24 編の構造から捉えた時に「律法」との関連がきっかけとなり、23 編においても、「死から命に至る旅」という文脈で、約束の地に至る出エジプトから荒野の旅のイメージが強く意識されると言う事ができる。

具体的には「欠けることがない」（23:1）⁷⁸は、荒野の 40 年間の何一つ不足はなかったとされる荒野の旅（申 2:7、ネへ 39:21）や約束の地（申 8:9）と共に響き、23 編 1 節で「欠けることがない」と歌われる時、そこに出エジプトと特に荒野での 40 年の旅路での主の備えと導きと、主への信頼を想起されると考えられる。その信頼は、15～24 編の文脈の中で読まれる時、死から命へと救い出していただいた創造主であり、全ての秩序を保ち導かれる全能の主への信頼である。それが、ダビデとモーセの姿が重ねられることで共同体の信仰告白となる。

また、「草」（23:2）⁷⁹は律法を通してもたらされる出エジプトの物語の中でのモーセの

際に契約の箱の前に「安住の地」を与えてくださったとする（列王上 8:56）。モーセは、契約の箱（民 10:33）、礼拝の場（申 12:9）、出エジプトの憩いの地（詩 95:1）として用いられるが、憩いの地には入れない。ダビデは、神殿建設準備（歴代上 22:9）、神殿宣言（歴代上 28:2）で契約の箱の安置を勧め、憩いの地に住むことに導かれる。上記の様にサムエル記において、神の箱の都への移設（サムエル記下 6 章）はダビデの歴史の決定的要素となるクライマックスであり、神を主体とする行為が前面に出る重要な個所である。出エジプトのモーセの物語と、ダビデの物語が重ねて響くのが「安息・憩いの地」という言葉である。羊飼いであられる主は、羊飼いである私を、この安息の地、つまり、契約の箱が安置されている場所、主との命の契約の原点となる場所へと取り戻すと言う意味である。よって安息も律法をイメージする語彙の一つである。

⁷⁸ 動詞 קָח は KHAT (515 頁) によると旧約聖書の中で 21 回使用され、その内 8 回がこの否定形の表現であり、出エジプトの荒野の旅に特徴的に用いられる。例えば、与えられるマナを少なく集めた者も不足しなかった事（出 16:18）、荒野の旅の 40 年間主が共におられたので何一つ不足することなく（申 2:7、ネへ 39:21）、旅の先に神の賜る地は何一つかけることのない土地であること（申 8:9）である。なお、裁判において最も困難な立証は「無いことの証明」であると言われている。一つでもある事が反証されれば成立しないからである。「欠けはない」との告白は、「満ち足りている」と満足を告白するのみにまして大きな信頼によるものであり、信じて委ねる者からしか発せられない言葉である。

⁷⁹ 名詞 קוֹמ (草) は KHAT (377 頁) によると旧約聖書の中で 15 回用いられる。偶像礼拝に陥る諸国民に対しては「草のように滅ぶ」と言う文脈で用いられる（列王下 19:26、詩 37:2、イザ 15:6、エレ 50:11）のに対して、イス

「死」というテーマを響かせる。更に「谷」(23:4)⁸⁰はモーセの旅(民 21:20)、律法(申 3:29, 4:46)、死(申 34:6)で用いられ、特にベト・ペオルの谷は、モーセが律法を読み聞かせ、死後に葬られた場所であり、主から与えられた律法と、モーセの死のイメージが響く。最後に、「机」(23:5)⁸¹は幕屋建設(出 25:23・27・28・30, 26:35, 30:27, 31:8, 35:13, 37:10・14・15・16, 39:36, 40:4・22・24, レビ 24:6, 民 3:31, 4:7)における供え物のパンを捧げるための聖別された机を指し、主の御臨在と深く関わる。

このように、「死から命に至る旅」という 15～24 編の主題を通して 23 編に齎される出エジプトから荒野、そして約束の地に至る旅が、サムエル記の主の主権のあるダビデの物語と共に、23 編に救済史の豊かな響きを与える。

②申命記の主題と律法による命

次に、19 編から与えられる「律法」との関連がきっかけとなって、申命記に記された律法の物語が 23 編に入り込み、15～24 編の「死から命に至る旅」と響き合う。

例えば、主がイスラエルを「宝の民」「主の聖なる民とする」と誓約してくださる(申 26:18-19)際の、イスラエルの民の誓約「主を自分の神とし、その道に従って歩み、掟と戒めと法を守り、御声に聴き従います」(申 26:17)は、15～24 編の「死から命に至る旅」と共通する語彙が豊かに用いられていることに気付かされる。例えば、イスラエルの民の誓約内の「戒め」「法」「声」はいずれも 19 編 9・8・4 節に用いられ、「道」「歩み」は上記

ラエルに対しては悔い改めからの「芽生え」や「現れ」として表現される(創 1:11, 同 1:12, 申 32:2, サム下 23:4, ヨブ 6:5, 同 38:27, イザ 66:14)。つまり、草と言う単語は、神でない者を神とする滅びの象徴として、また、悔い改めによる命の象徴として用いられる。

また、モーセの死を前にした最後の詩(申 32:2)、及びダビデの最後の詩(サム下 23:4)に用いられ、また命の意味を問うヨブ(ヨブ 6:5)と主の顕現による答え(ヨブ 38:27)、イザヤ書の最終章(66:14)にも用いられている。このように、一見、「草」は牧歌的なイメージであるが、命と死に共振して、偶像礼拝に陥る人間の罪と、その滅びゆく者を真の悔い改めに基づく贖いによって、命へ導くと言うことも象徴しており、「死から命に至る旅」という 15-24 編の物語的展開と一致している。一見ポジティブな単語に、死と命のメタフォリカルな表現が隠されている。死と命に関連する箇所的印象的に用いられている言葉であると言うことができる。

⁸⁰ 名詞 **אֵי** は KHAT(322 頁)によると旧約聖書内で 60 回用いられる。モーセに関して用いられる四か所は上記の通り。ダビデにおいては、サウルがベリシテ人との戦いで契約に背くのがツェボイムの谷(サム上 13:18)であり、ゴリアトとの戦いの勝利の場で谷が描かれ(サム上 17:3・52)、エドム人を撃った決定的勝利の場所が塩の谷(サム下 8:13, 歴上 18:12)である。塩の谷の勝利は、Sumpter がサムエル記の文脈でダビデの中心的物語とする重要な箇所である。詩篇では 23:4 以外で唯一「谷」が用いられる 60 編 1 節も塩の谷でのダビデの勝利を歌う。その他、歴上 4:39 には羊の群れのための牧草地を得る所で谷が用いられる。その他の箇所で特徴的なのは、エゼキエル書 39 章でマゴグのゴグの箇所で墓地という「死」のイメージとして用いられている。この様に、「谷」もモーセとダビデを同時に思い起こす語彙である。また「谷」は律法と死と勝利が隣り合わせている緊迫した場を示す。これに更に、23 編では「死の陰の」が付加され、律法を守ることができずに滅亡を迎える危険な死の陰の谷を渡るような人間の在りようを表現している。

⁸¹ 名詞 **אֵי** は 71 回用いられる。モーセにおいては、幕屋建設の指示、準備、命令の箇所で、幕屋の中に設置される供え物のパンを捧げるための聖別された机を指す。祭儀と関連する(出 25:23・27・28・30, 26:35, 30:27, 31:8, 35:13, 37:10・14・15・16, 39:36, 40:4・22・24, レビ 24:6, 民 3:31, 4:7)。これに対して、ダビデは、神殿建築の宣言においては、モーセと同様に、供え物のパンを捧げる聖卓を指すが(歴上 28:16)、祭儀とは直接は関係のない食事の席での食卓を指す使用例の方が多く(サム上 20:29・34, サム下 9:7・10・11・13, 19:29)、ダビデ王の最期に食卓に連なる者として印象的に用いられる(サム下 9:7)。

の様に 15～24 編の主の道を歩む旅の物語的展開の重要な鍵語である。こうして、19 編を通して 23 編にも律法のテーマが関連する時、それが申命記の響きをも齎し、「主を自分の神と」するという誓約は、「主は私の羊飼ひ」（23：1）という信仰告白と共鳴する。

申命記で神の祝福と呪いが「生と死」（申 30:15-20）とされ、「わたしが命じるとおり、あなたの神、主を愛し、その道に従って歩み、その戒めと掟とを守るならば、あなたたちは命を得」（同 16）と、律法と命と旅が結び付けられる。そして、申命記の「律法の言葉…は…あなたたちの命である」（申 32:46・47）という約束が、主は私の魂をよみがえらせる（23:3）所に豊かな和音を与える。

更に、モーセの歌（申 32 章）は、15～24 編につながるモチーフが多用されている。「岩」（申 32:4・15・30・31・37）や「避けどころ」（同 38）という、揺るがない堅固な死を否定する表現や、「完全」（申 32:4）、「道」（同）という 15～24 編の「死から命に至る旅」を物語る重要な鍵語とモチーフ（上記）が用いられ、「導き」、「導き上り」（申 32:12・13）という旅のイメージもある。その他にも、「青草」（申 32:2、23:2）、「養ひ」（申 32:13）、「油」（申 32:13、23:5）や、「瞳のように守り」（申 32:10、17:8）、「わたしのほかに神はない」（申 32:39、18:32）が共鳴する。神の怒りと自然災害（申 32:21-22）は 18 編 9 節を連想させる。敵が脂肪を注がれた酒を飲む（申 32:38）が、23 編では「あなた」と呼びかける主ご自身が食卓を整えてくださるという逆転も起こされている。このように 15～24 編の文脈で読む時に、ダビデの歌が 18 編としてサムエル記の文脈を齎すのと重ねて、申命記のモーセの歌も 23 編に響く。

このように、15～24 編の文脈で 23 編を読むことで、19 編との律法の共通点から申命記の文脈も 23 編に齎され、通奏低音のように「律法」のテーマが響き、「命に至る旅」に救済史の累積的な理解を与える。

（3）小結論

このように 15～24 編の構造から導き出される文脈で読むとき、23 編は律法のテーマと深く結び合わされ、それにより、出エジプトから約束の地に至る旅と、申命記と律法というモーセ五書の主題との関係も生み出されると言える。

旧約聖書において、契約共同体を形成する法は十戒の序言（出 20:2）にあるとおり救済の歴史性を有し、それを絶えず想起し保持する契約共同体である⁸²。サムエル記のダビデ

⁸² 小友、『旧約聖書と教会』, (教文館, 2021), 140-147.

の物語と同時にイスラエルの出エジプトの旅（モーセ）が想起されることで、Sumpterの集中構造における前進的理解にイスラエルの救済史が重ねて想起され、「命に至る旅」と言う主題を強め、複層的な視点の深まりを与える。

3, 15～24 編の全体構造から見た 23 編の中心主題

以上の 23 編の中心主題の議論を要約すると、まず、上記の 15～24 編の集中構造における「死から命に至る旅」の物語的展開の中で、23 編は 19 編の主による贖いの後の後半に位置し、主の贖いにより罪を清められた後、更に主の義しい道に導かれ続け、遂に創造の完成の主の祝福という真の命に入れられるための旅の過程、つまり旅の「歩み」の中にある。そして、15～24 編の中で 23 編を読む時、その旅には 19 編によって律法のテーマが豊かに響き、それがきっかけとなって出エジプトの「旅」と申命記の「律法」の主題をも複層的に響かせる。更に、贖いを経た後での命への旅の歩みは、主の臨在と「主であるあなたが共にいてくださる」という信仰告白に強調点があることが 23 編の枠構造（囲い込み）及び集中構造の中心から明らかとされた。

よって、15～24 編の全体構造から見た場合、23 編の中心主題は「主と共に」「命に至る旅の」「歩み」である。これは、従来の類型論による 23 編からの解釈からは別々に導き出された「旅」（羊飼いの表象）と「命」（食卓の主の表象）と「神殿」（結合型）を、一貫したテーマでより広い神学的文脈に位置づける解釈であるとも言うことができる。

4, 旅の目的地に帰る旅－「主の家」に「帰る」（23 編 6 節）

23 編の解釈の最後に、翻訳が大きく分かれる 6 節の **וּשְׁבַתִּי** について、これまでの検討を踏まえ、「主と共に命に至る旅の歩み」という主題から検討する。

上記(6:n)の通り、**וּשְׁבַתִּי**には「帰る」(**שׁוּב**のカル型・接続₁を伴う完了（意味は未完了）・一人称単数）と、「住む」(**יָשַׁב**カル型・接続₁を伴う完了（意味は未完了）・一人称単数）の二通りの訳が考えられる。マソラ本文は「帰る」である。しかし、BHS の批評的脚注には、「七十人訳では『わたしの住むこと』とあるので、恐らく、私は住む (**יָשַׁב**) と読むべきであろう」という訂正意見が述べられている。また、北西セム語との関連からダフドも「住む」を支持する⁸³。文語訳聖書、口語訳聖書、聖書協会共同訳聖書、フランシスコ

⁸³ 本間敏雄, 「帰り行く家」, 『形成』276(1993), 38.

会訳聖書、新改訳聖書のいずれも「住む」を採用する。マソラ本文を「住む」と読み替える根拠は、27編4節との整合性にあると考えられる。これに対し、新共同訳聖書は「主に家にわたしは帰り/生涯、そこにとどまるであろう。」と訳し、「帰る」と「住む」の二重の意味で用いられる詩的表現として訳出している。確かに、**בִּישׁ**でも**בִּישׁ֩**でも不規則変化であり、詩的表現として敢えてあいまいな表現により二重の意味が包含されているとも考えられる。

しかし、上述のように15～24編の「死から命に至る旅」から導き出される23編の中心主題は「主と共に死から命に至る旅の歩み」であることから、6節は命ある限り主と共にある旅が続けられ、遂に永遠の旅の目的地に帰り着くという文脈にあり、マソラ本文のとおり「帰る」と読むことを選択する。同じ23編の中で「魂が生き返る」(23:3)に**בִּישׁ**が用いられているという動詞の並行性も構造的な根拠である。

また、「律法」に関する18編21節(わたしの手の清さに応じて返してくださる)及び25節(主はわたしの正しさに応じて返してくださる)にも**בִּישׁ**が用いられており、「律法」は15～24編を貫く重要なテーマであり、上述のとおり23編も律法の響きの中にあることから、**בִּישׁ**という言葉が重ねて用いられていると考えられる。

このように語根が**בִּישׁ**であるとする、23編3節は規則的な未完了形の動詞変化であるのに対して、本節は不規則な動詞変化になっているのは、特別な時制の強調表現であると考えられる。つまり、上述(1:b)の様に23編における未完了形は過去の状態の現在・将来への継続を意味するのに対し、6節は、旅の先の目的地と言う将来に実現する未だ起こっていないことを示す。完了態は多くは過去を指すが、預言や断言においては、未来における行為が確かだ完了したとみなされる(確述意識)場合(預言的完了)、あるいは宣言的(遂行的完了形)にも用いられる⁸⁴。本節も預言的完了、遂行的完了を表し、それに加えて不規則変化により、神の主権の中で将来において必ず実現されることを強調する表現であると考えられる。以上の考察から、本文を「**בִּישׁ**帰る」で確定し、意味上は未来を表すと考える。

以上の考察から、結論として「帰るだろう」と訳する。これにより、15～24編の文脈において旅の目的地に向かう旅がより鮮明に提示される。

⁸⁴ 本間敏雄、『ヒブル語入門改訂増補版』, 92.

5, 小結論

15～24編の「死から命に至る旅」の物語的展開の文脈における23編の中心主題は、23編の構造分析及び鍵となる語彙の分析の結果、「主と共に命に至る旅の歩み」であると結論付ける。創造主であり、全能であられる主の秩序の中にある「死から命に至る旅」の中で、主による贖いを受けた者が、まさに今「主と共に」「歩」いているのだという信仰告白である。

第6章 詩編編集の歴史的背景の考察

最後に、詩編編集の歴史的背景を考察する。ここでは、初めに詩編の編集過程を整理した上で、15～24編の「死から命に至る旅」という物語的展開の編集目的における重要性を示唆した上で、最後に詩編全体の編集目的と詩編編集者に関する暫定的な見解を示す。

1, 書物としての詩編が生み出された過程

まず、詩編編集過程を整理し、15～24編が詩編編集過程において最古の詩編集のひとつであり、この詩編集が詩編全体の編集に大きな影響を与えた可能性を示す。

詩編には、個々の詩編が王国時代から捕囚を経てペルシャ時代・ヘレニズム時という広い年代に執筆されてゆくのと並行して、捕囚後からヘレニズム時代にかけて書物として編集されたプロセスがある。死海文書を根拠に、ダビデ的支配をテーマとする第一から第三巻(2～89編)が編集された後に、ヤハウエの支配をテーマとする第四・五巻(1・90～150編)が編纂されたという、詩編編集を大きく分けて二段階で考えるモデルが詩編編集史研究において広く受け入れられている。⁸⁵

その具体的な形成過程は、Zengerの編集モデル⁸⁶によると、まず初めに、前6～5世紀に、ダビデ詩編(3～41編)、ダビデ・アサフ構造体(50～83編)・エロヒスト詩編(42～83編)が順に編纂され、第一段階の第一巻から第三巻が『メシアの詩編』(2～89編)として編纂される。続いて第二段階の編集が進み、次に前5～4世紀に2編及び90～100編が加えられ、『王としての主なる神の詩編』(2～100編)が編纂され、更に、101～106編が加えられて『歴史の神学の詩編(モーセ五書の歴史的視座)』(2～106編)となる。

⁸⁵ 田中光, 「詩編を祈り、賛美するために 第三回・イスラエルの詩編②書物としての詩編が生み出された過程」, 『季刊教会』130(2023): 15-31.

⁸⁶ E. Zenger u.a., *Einleitung in das Alte Testament*, 9., aktualisierte Auflage herausgegeben von Christian Frevel (Stuttgart: Kohlhammer, 2016), 446-447. ここでの要約は、註85(16-19頁)による。

その後、107～136 編が加えられて『シオンの詩編』（2～136 編）が付加され、前 3 世紀に『モーセの律法』（1～145 編）、最後に 2 世紀に『ハレルヤ編集』（1～150 編）が追加され、現在の 1～150 編の形に編纂された。

15～24 編の編集過程をより具体的に見ると、まず、紀元前 6 世紀にいくつかの欠けのある形で 15～24 編という一つのまとまりが作られ（15・17・18・20・21・22・24 編）、そこに、紀元前 6～5 世紀ごろにいくつかの詩編（16・19・23 編）が加えられて編集的な書き継ぎがなされ、15～24 編という小詩編集が形成されたとされる。⁸⁷

この詩編の編集過程において、詩編の祭儀的要素が後退し、音楽的、預言的、知恵的要素が前面に出てきたと言える⁸⁸。

2, 編集目的の検討

以上の編集過程から、15～24 編の編集時期は捕囚後初期の紀元前 6～5 世紀頃である。歴史的背景から編集目的を考えるに、捕囚後の神殿再建に関する神殿神学や、捕囚後の状況の中で貧者の神学が主張されており⁸⁹、その特徴である義の秩序の貫徹という点は、律法と創造に言い表される神の秩序というテーマと合致する。しかし、15～24 編の編集目的には、「死から命に至る旅」というより大きな根源的なテーマがあるのではないかと考える。それは、15～24 編の小詩編集が完成する際に加えられたのが、核となる 19 編と、16・23 編という「信頼の歌」の並行詩であることにも表れている。上述（第 4 章 2 (1) ①）の様に、16・23 編は「魂」「命」という「死から命に至る旅」の特徴的なモチーフの連鎖を生む語彙が特徴的に配置されている詩編で、また、19 編は 15・24 編の外枠の詩編（律法・律法の完成）を創造と繋いで枠構造に前進する動きを与え、律法による魂の甦り（ここで 23 編が律法による命に密接に結び合わされる）と悔い改めと主による贖いを配置して、後半の主と共にある旅の歩みという物語的展開を発展させるものである（第 3 章 2）。16・

⁸⁷ E. Zenger u.a., *Einleitung in das Alte Testament*, 446-447. ここでの要約は、註 85(16-19 頁)による。

⁸⁸ ①祭儀的要素：詩篇編纂過程において後退したと言うのが定説化している（Gunkel, Mowinckel 等）。田中は完全に退いているとは言えないものの、編纂目的は非祭儀的（非神殿的）なものであり、神殿祭儀の宗教から書物の宗教へと次第に変質していった歴史的事実と相即しているとする。②音楽的要素：詩編全体がダビデと結び付けられることにより強められる。編集意図はダビデが神を音楽によって賛美したことも含めて「祈りの模範（Zenger）」とすることにあるとも考えられる。仮に神殿で礼拝できない状況にイスラエルの民が置かれ続けるとしても、詩編のことは歌う様になったと言える。③預言的要素：ダビデとの結びつきは、詩編全体を預言化する意図があったと言えるか。単に礼拝の言葉であるだけでなく、将来における神の摂理を知るための言葉としても編纂されたといえる。④知恵的要素：編纂過程において前面に出てきたと言える。Zenger は 3・4・5 巻の始まりがいずれも知恵の詩編（73 編, 90-92 編, 107 編）であることを指摘し、詩編全体がダビデの律法と位置付けられるとする。これはバビロン捕囚（離散したユダヤ人）の知恵であると考えられ、書物さえあれば、神の現臨に与かり将来の指針と霊的な糧を得られるようにする目的がある。（註 85、21-24 頁）

⁸⁹ 田中光, 「詩編を祈り、賛美するために; 第三回. 書物としての詩編が生み出された過程」, 16-17.

19・23 編の追加による 15～24 編の小詩編集の完成という編集過程は、最終的な 15～24 編の編集目的が「死から命に至る旅」がであったことを根拠づける。このように、命への旅のイメージ、「死から命に至る旅」は、捕囚とその解放の記憶が濃厚な捕囚直後の時代における新しいテーマであったと考えられる。

また、これまでの議論を踏まえた上でのあくまで暫定的な見通しであるが、詩編の中で最古の詩編集の一つである 15～24 編の「死から命に至る旅」という主題は、その後の詩編編集の基調となったのではないとも考えられる。詩編 1 編は律法の詩編であり、最後に天の国でのハレルヤの讚美 (146～150 編)⁹⁰に導かれるというダイナミズムは、15～24 編と同様の「死から命に至る旅」を物語っており、その間に、陰府からの救済⁹¹と言う死から命への物語がテーマとなるコラの子の詩 (42～49 編、84～85 編、87・88 編) があり、旅をイメージする都のぼりの詩 (120～134 編) も配置されている。更に、都のぼりの詩の直前には、119 編という最大の律法の詩が配置され、律法のテーマが詩編全体に響きをもたらす (1、19、119 編)。更に、23 編の中心主題の検討の中で、15～24 編の構造により見いだされる律法との密接な関連を通して、「ダビデの詩」に既にモーセ五書 (特に出エジプトと申命記) の主題が関連することは、第 1～3 巻と第 4・5 巻という詩編編集過程での最も大きな区分を繋ぐ第 4 巻の冒頭に「モーセの歌」(90 編) が配置されたことに影響する可能性もある。

また、詩編編集過程において、音楽的、預言的、知恵的要素が前面に出てきたとすれば、上記語彙分析において 15～24 編にちりばめられている「揺るがない」(בִּלְלוֹ לֹא מוֹט) に関連する死 (מוֹת) のメタファーは、知恵的要素が強く、また耳で聞く音 (音楽的要素) により、死と命という預言的要素を加えられたとも考えられる。また、15～24 編全般にわたる第二イザヤとの語彙の共通 (註 5 参照) は預言的要素の強まりを反映する可能性もある。更に、神殿祭儀ではなく書物として詩編を読むことが意図されているのであれば、詩編は前から順に読まれることも編集意図に含まれていると考えられ、15～24 編の小詩集の物語的解釈方法を、歴史的に裏付けると考えられる。

⁹⁰ Lofink によると、146 編から 150 編は、ダビデ個人の讚美 (146 編) にエルサレム (147 編)、天に存在する者、地上世界のあらゆる者 (148 編) の讚美が加わり、主の慈しみに生きる人の集いの新しい歌 (全宇宙的な神讚美へ) が歌われ (149 編)、ついに息ある者はこぞってハレルヤと主を賛美するに至る (150 編) という連鎖が起こる。ローフィンク、『詩編理解にとっての最終編集の意義』, 72-74.

⁹¹ David C. Mitchell, "God Will Redeem My Soul from Sheol: The Psalms of the Sons of Korah," In *Journal for the Study of the Old Testament*, 30.3(2006): 365-384.

3, 詩編編集者についての提案

最後に、上記の詩編の中で最古の詩編集である 15~24 編の「死から命に至る旅」が詩編全体の編集の基調になったという暫定的な見通しに基づき、詩編編集者について検討すると、その詩編編集者は「レビ的祭司（レビ人）」である可能性が高いと考える。

議論に先立ち詩編編集者についてのまとめると、「レビ的祭司（レビ人）」とする解釈の他に、「知恵の伝統に仕える者たち（賢者、書記）」や、「預言者の伝統に属する人」とする解釈がある⁹²。加えて、Hossfeld/Zenger⁹³は、詩編編者は黙示思想に親近感を覚えるハスモン王朝以前のハシディーム（敬虔な者たち）であるとし⁹⁴、飯謙⁹⁵は、Zenger の見解は編集者のハシディームへと安易に同定するところに錯誤あるとして批判し、編集者は特定の集団ではなく、共同体から排除された者や神殿神学に違和感を覚える者が自然発生的に緩やかに集まり集団形成した者であるとする⁹⁶。

田中⁹⁷は、詩編の編集は捕囚後の時代までの没落や歴代誌の記された第二神殿時代の状況に共鳴すること、またダビデによる権威付けが行われている事、そして律法への関心（申 31:25-29、ネヘ 8:7）や預言的働き（代上 25:1、下 30:13-19）から、律法・知恵の伝統と預言の伝統を調停する存在として、レビ的祭司を編集者と仮定する。レビ人は、祭司の様に神殿祭儀に関わる人ではなく、神殿で讚美を歌う役割を担い、また「貧しい者たち」であり没落の経験であるからである。

ここまでの議論を踏まえると、15~24 編は集中構造にも物語的展開にも深く「律法」によって貫かれており、ダビデによる権威付けは Sumpter の 15~24 編をサムエル記の文脈に置くことと一致する。また、預言的要素については、前述のとおり註 5 の 15~24 編にある第二イザヤと共通する語彙やモチーフが共に響き合うと言える。

また、15~24 編の「死から命に至る旅」の物語的展開は、死後の世界についての言及も際立つコラの子の詩（42~49 編、84・85 編、87・88 編）と特に響き合い、このコラの子

⁹² 田中光、「第三回・イスラエルの詩編②書物としての詩編が生み出された過程」：15-31。

⁹³ Sumpter, "The Coherence of Psalms 15-24," 220.

⁹⁴ なぜなら、詩編そのものが、終末論的な生き方の知恵を示す書として最終形態を獲得しているからであるとする。つまり、詩編により神を求め讃えることで、祝福と救いが読み手に到来し、詩編は、読み手たちにとって「聖所」として機能するとされる。よって、最終編集による詩編の生の座は「知恵の学校」にあり、神殿貴族やヘレニズムの傾向に距離を置き、信徒のための民衆の書物として、律法、知恵、終末論、「貧者の信仰」と結びついて発展したとされるからである。引用同上。

⁹⁵ Sumpter, "The Coherence of Psalms 15-24," 223-227.

⁹⁶ 神殿運営法やその教義への疑念が共通項であり、神殿詠唱者の下級祭司が重要な役割を担ったと推測する。自らの意識でヤハウエ信仰を考え、自らの言葉を求め、自らの生きざまを決定しようとした人々が、多方面からの発言に聞き入りながら、自身を整える「対話の書」が詩編であるとされる。引用同上。

⁹⁷ 田中光、「第三回・イスラエルの詩編②書物としての詩編が生み出された過程」：15-31。

の詩編集の共時的な解釈⁹⁸による「シェオール（陰府）からの救済」というテーマは、「死から命に至る旅」の具体的内容として響く。この表題「コラ」は、子孫について唯一言及のあるのはレビ人（民 26:11）のコラであると考えられており⁹⁹、詩編編集者が「レビ的祭司（レビ人）」であることと整合性がある。さらに、このレビ人コラは、神殿付詠唱者（歴上 6:22, 歴下 20:19）であると同時に神殿の門衛（歴上 19）であり、24 編の旅の到着で王なる主が来られる最後に、「門」が身を起こす（24:7・9）描写と共振する。

この様な視点から、上記のこれまでの考察を前提とする暫定的な見通しであるが、詩編編集者は「レビ的祭司（レビ人）」である可能性が高いと考える。

4, 小結論

以上、これまでの考察に基づき、編集史から 15～24 編の編集時期が捕囚解放直後であることを鑑みると、集中構造における「死から命に至る旅」という物語的展開が、15～24 編の小詩編集の編集における、より根源的なテーマとして編集目的に含まれるのではないかと言う点を指摘した。更に、この「死から命に至る旅」という編集目的は、詩編 1～150 編という詩編全体の編集にも影響を及ぼした可能性があり、そうすると、詩編編集者がレビ的祭司（レビ人）とされる可能性が高いと考えられるという、暫定的な見通しを提示した。

⁹⁸ David C. Mitchell. "God Will Redeem My Soul from Sheol: The Psalms of the Sons of Korah," *Journal for the Study of the Old Testament*, 30.3(2006): 365-384.

⁹⁹ Mitchell, *God Will Redeem My Soul from Sheol*, 367.

結論

以上のように、本論文では、23編の中心主題を検討する際に、従来の23編単体に着目する解釈から視点を変え、15～24編の全体構造から見た中心主題の探究を行った。Auffretによる15～24編の集中構造を前提とし、中心詩編19編を核とした人間中心的な解釈に批判的考察を述べた上で、集中構造についてアスペクトによる前進的な神学的理解を提示した Sumpter の神中心の神学的考察を紹介した。Sumpter の結論は、15～24編は全体構造として、律法が創造に結び付けられ、最終的に神殿の奥に見出される神の祝福に至る上昇の旅という神の摂理が提示されるとするものであった。

更に、この Sumpter の議論を基礎に、「死」と「命」に関連する語彙のモチーフの連鎖構造や、「揺るがない」と「死の否定」のメタファーの連鎖構造の分析により、15～24編を配列順に読んだ時に示される「死から命に至る旅」という物語的展開を新たに提示した。そして、この物語的展開を補完する語彙の連鎖と Sumpter の理論との整合性を検討し、主の贖いによる「死から命に至る旅」は、上記の Sumpter の神学的考察をより大きな文脈の中に置き深めるもので、アスペクトによる複層的な視点を新たに加えるものであることを論証した。

更に、上記の15～24編の「死から命に至る旅」という物語的展開の文脈において23編を読む際、23編の中心主題は「主と共に命に至る旅の歩み」であることを、23編の構造分析や語彙分析から示した。また、15～24編の構造から23編も「律法」と密接に関連し、そこからモーセ五書の主題も響きを与えられることで、23編はイスラエルの救済史の重層的な想起の中での旅の歩みにある者の信仰告白であると言う、複層的な視点の深まりを提示した。

最後に、詩編編集史を概観し、15～24編の編集目的には「死から命へ至る旅」という新たな視点が基礎に据えられている可能性を指摘した。更に、この最古の詩編集の一つである15～24編の編集意図が、詩編全体の編集の全体影響を及ぼすような重要な基礎となっている可能性を指摘し、そうであれば詩編編集者はレビ的祭司（レビ人）である可能性が高いという暫定的な見通しを提示した。

以上の考察から、15～24編の集中構造の物語的展開の文脈から導かれる中心主題「主と共に命に至る旅の歩み」により、23編は、神の秩序の中での魂の根源的な救済を得た者の、主の祝福と言う希望に満ちた最終目的地に向かう旅の歩みが、羊飼いであらわれる主のご臨在の中で導かれていることと、その全幅の信頼の現実が歌われている詩である。本論文の

序論の初めに、23編は教会と個人の信仰告白であると述べたが、まさに使徒信条の「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」と言う信仰告白が、15～24編の「死から命に至る旅」という物語的展開の文脈の中で「主はわたしの羊飼い、わたしに欠けなし」という信仰告白として響くのである。そして、その旅は、律法によって示される主のご支配、主の大きな救いのご計画の中で、主により安息と魂のよみがえりを与えられ、力づけられ、糧を与えられて、主の恵みと慈しみに追われて、将来、遂に主の家に帰ると言う目的地へ至る旅である。その旅は、死が切迫するような危機的状況（捕囚後初期の時代背景）の中であって、命へと導いてくださる主ご自身が伴って歩んでくださっているから、欠けはなく、恐れもないという、主によって与えられる安心と希望とに満ちている。主と共に、死から命に至るその旅の歩みにある者の幸いを歌い、心からの信仰告白の言葉を祈る。

以上が本論文の議論から導き出される結論である。ここからはその結論を踏まえて、どのような神学的意義が見出されるかを補足的に述べて、論文全体を締めくくるとしたい。15～24編の「死から命に至る旅」の文脈の中で、主に贖われた者が、共に主の祝福を受ける主の臨在に遂に入れられる旅を主と共に歩む 23編は、洗礼を受け、罪を贖われたキリスト者自身が、既にと未だの中間時というまさに今を生きる日々に歌われる信仰告白の歌であると考えられる。

わたしたちの良い羊飼いは主イエス・キリスト（ヨハネによる福音書 10 章 11・14 節）であり、主はわたしたちが再び命を受けるために、十字架にお掛かりになり、命を捨てられて（同上 17 節）、わたしたちの罪を贖ってくださった。自分の行いで義を獲得しようとするような者が、主の十字架の贖いによって信仰によって義とされるのが洗礼の恵みである。洗礼により、主の正しい道に取り戻され、主の秩序の中で生かされ命を得るのである。

更に主は復活されていつも共にいてくださり、わたしたちの旅の歩みに伴ってくださる。その歩みの中で主は、主の安息に招き入れて、魂をよみがえらせ、主の鞭と杖で力づけ励まして立ち上がらせ、主の家に帰る旅に送り出し、その旅に共に歩み出してくださるのである。これは、主日ごとの礼拝への招きと、御言葉による悔い改めと命と感謝の応答と派遣であり、派遣された先の日常の営みである。

このように、15～24編に示される「死から命に至る旅」は洗礼により救われるわたしたちの物語であり、更に 23編は主日ごとに礼拝に取り戻され、十字架の贖いにより罪赦され、御言葉により励まされ立ち上がらされて、日常の営みに派遣され、復活の主が伴ってくださるその旅は、終わりの時に天の国に入れられる主にある希望を仰ぎ見て歩む旅の歩

み、「主と共に命に至る旅の歩み」そのものである。「主こそがわたしの羊飼。わたしは欠けることがない。贖い主であられる主、あなたこそが、わたしと共にいてくださる。」という、主によって集められた一人一人の信仰告白が、ダビデとモーセの姿が重ねられるようにして、わたしたちの教会の信仰告白となるのである。主の秩序・摂理の中で真の命へと歩む旅の中にあるわたしたちも、この物語の中を生かされているのである。このように、23編もキリストを豊かに指し示していると言えるであろう。

(39,980 字)

参考資料

〈一次文献〉

Elliger, K., W.Rudolph et al. eds. *Biblia Hebraica Stuttgartensia (BHS)*. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1967/77.

Rahlfs, Alfred. ed. *Septuagint : Id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes*. Editio altera by Robert Hanhart. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2006.

The Holy Bible, English Standard Version (ESV). Wheaton, IL: Crossway, 2001.

The New Revised Standard Version of the Bible (NRSV). U.S.A: The Division of Christian Education of the National Council of the Churches of Christ, 1989.

旧約聖書翻訳委員会. 『旧約聖書 I 律法』. 岩波書店. 2004.

共同訳聖書実行委員会. 『聖書 新共同訳』. 日本聖書協会. 1988.

新日本聖書刊行会. 『聖書 新改訳』. いのちのことば社. 1970.

新日本聖書刊行会. 『聖書 新改訳 2017』. いのちのことば社. 2017.

日本聖書協会. 『舊新訳聖書－引照附』. 日本聖書協会. 1980.

日本聖書協会. 『聖書 口語訳』. 日本聖書協会. 1955.

日本聖書協会. 『聖書 聖書協会共同訳－旧約聖書続編付き』. 日本聖書協会. 2018.

フランシスコ会聖書研究所. 『聖書 フランシスコ会研究所訳注』. サンパウロ. 2011.

〈事典、辞書、コンコーダンス、文法書〉

Botterweck, G. Johannes, Helmer Ringgren, and Heinz-Josef Fabry, eds. *Theological Dictionary of the Old Testament. Vol.1-15, (TDOT) Revised*; Accordance electronic ed., version 1.5. Grand Rapids, MI: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1974-2006.

Brown, Francis., S.R.Driver. and Charls A.Briggs. *A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament. With an Appendix Containing the Biblical Aramaic (BDB)*. Oxford: Clarendon Press, 1907.

Harris, R. Laird, Gleason L. Archer, Jr., and Bruce K. Waltke, eds. *Theological Wordbook of the Old Testament Vol.1*. Chicago: Moody Press, 1980.

Klauck, Hans-Josef. *Encyclopedia of the Bible and its Reception. Vol.3*. Berlin: De Gruyter,

2010.

Liddell, H. G. and R. Scott. *Greek-English Lexicon*. Oxford: Clarendon Press, 1996.

S. Mandelkern. *Veteris Testamenti Concordantiae Hebraicae atque Chaldaicae*. Granz, 1955.

T. G. Lisowsky. *Konkordanz zum hebräischen Alten Testament*. Stuttgart: Privileg. Württ. Bibelaustalt, 1958.

W. L. Holladay, *A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament*. Leiden: E. J. Brill, 1906.

旧約新約聖書大事典編集委員会編 . 『旧約新約聖書大事典』 . 教文館. 1989.

左近義慈(編)、本間敏雄(改訂増補). 『ヒブル語入門改訂増補版』 . 教文館. 2011.

〈二次文献(1) 欧文文献〉

Alter, R. *The Book of Psalms*. New York: Norton. 2007.

Auffret, P. “Les Psaumes 15 a 24 comme Esemble Structure,” *La Sagesse a Bati sa Maison: Etudes de Structures Litteraires dans l’Ancien Testament et Specialement dans les Psaumes*, Orbis Biblicus et Orientalis 49. Fribourg Gottingen: Editions Universitaires-Vandenhoeck, 1982.

Craigie, P. C, and Marvin E. Tate, *Psalms 1-50 (second edition)*, Word Biblical Commentary. Grand Rapids: Zondervan, 2004.

Gillingham, Susan. *Psalms Through the Centuries: A Reception History Commentary on Psalms 1-72*. West Sussex, UK: Wiley Blackwell, 2018.

Goldingay, John. *Psalms Volume 1, Psalms 1-41*. Baker Commentary on the Old Testament, Wisdom and Psalms, Baker Academic, 2006.

Hossfeld, F.-L. and E. Zenger. *Die Psalmen, Psalm 1-50*. Die Neue Echter Bibel. Wurzburg: Echer Verlag, 1993.

Illman, K. J., H. J. Fabry and H. Ringgren. “**מוֹת**.” In *TDOT* vol. 8., Pages 185-209. Grand Rapids: Eerdmans, 1983-1984.

Kraus, Hans-Joachim. *Psalms 1-59*. A Continental Commentary. Minneapolis: Fortress Press, 1993.

Kraus, Robert. *The Book of Psalms: Translation with Commentary*. New York: Norton, 2007.

Mitchell, David C. “God Will Redeem My Soul from Sheol : The Psalms of the Sons of

- Korah.” , *Journal for the Study of the Old Testament*, 30.3(2006):365-384.
- Miller, P.D. “Kingship, Torah Obedience, and Prayer: The Theology of Psalms 15-24”, *Neue Wege der Psalmenforschung*. Festschrift Fur Walter Beyerlin (eds, K. Seybold-E. Zenger) (Freiburg im Br.1994): 127-142.
- Miller, P. D. *Interpreting the Psalm*, Minneapolis: Fortress Press. 1986.
- Ringgren, H. “היה.” In *TDOT* vol. 4., Pages324-344. Grand Rapids: Eerdmans, 1980.
- Sumpter, Philip. “The Coherence of Psalms 15-24”. *Biblica* , vol.94, No.2(2013): 186-209.
- Sumpter, Philip. *The Substance of Psalm24 : An Attempt to Read Scripture after Brevard S. Childs*. Library of Hebrew Bible/ Old Testament Studies 600, London. Bloombury T&T Clark, 2015.
- Terrien, Samuel. *Psalms and Their meaning for today*. Indianapolis: The Bobbs-merrill company. 1952.
- Terrien, Samuel. *The Psalms Strophic Structure and Theological Commentary*. Grand Rapids: Eedmans, 2003.
- Zenger, E. u.a. *Einleitung in das Alte Testament*. 9. aktualisierte Auflage herausgegeben von Christian Frevel. Stuttgart: Kohlhammer. 2016.

〈二次文献(2) 日本語文献〉

- アウグスティヌス, A. 『アウグスティヌス著作集 18/ I 詩編註解(1)第 1-32 編』, 今義博・大島春子・堺正憲・菊地伸二(共訳). 教文館. 1997.
- アブリ, J. 『創造と救い—創世記における聖書の序論—』. エンデルレ書店. 1963.
- アンダーソン, B. W. 『新しい創造の神学—創造信仰の再発見』, 高柳富夫(訳). 教文館. 2001.
- ヴァイザー, A. 『A T D旧約聖書註解 2 詩篇上』, 安達忠夫(訳). A T D・N T D聖書註解刊行会. 1983.
- ヴェスターマン, C. 『詩篇選釈』, 大串肇(訳). 教文館. 2006.
- ヴォルフ, H. W. 『旧約聖書の人間論 (オンデマンド版)』, 大串元亮(訳). 日本キリスト教団出版局. 2005.
- カルヴァン, J. 『カルヴァン旧約聖書註解 詩編 I』, 出村彰(訳). 新教出版社. 1974.
- キドナー, D. 『ティンデル聖書註解詩編 1-72 編』, 橋本昭夫(訳), いのちのことば社, 2013.
- クレメンツ, R. E. 『近代旧約聖書研究史 ヴェルハウゼンから現代まで』, 村岡嵩光(訳).

- 教文館. 1978.
- ケラー, W. F. 『羊飼いが見た詩篇 23 篇』, 舟喜順一(訳). いのちのことば社. 1979.
- ケール, O. 『旧約聖書の抽象世界-古代オリエントの美術と「詩編」』, 山我哲雄(訳). 教文館. 2010.
- ナイト, G. S. F. 『デイリー・スタディ・バイブル』, 尾崎安(訳). 新教出版社. 1990.
- ブルッゲマン, W. 『古代イスラエルの礼拝』, 大串肇(訳). 教文館. 2008.
- ブルッゲマン, W. 『旧約聖書神学用語辞典：響き合う信仰』, 小友聡・左近豊(監訳). 日本キリスト教団出版局. 2015.
- ヘルマン, S. and クライバー, W. 『よくわかるイスラエル史：アブラハムからバル・コクバまで』, 樋口進訳, 教文館, 2003.
- メイズ, J. L. 『現代聖書注解 詩編』, 左近豊(訳), 日本キリスト教団出版局. 2000.
- リングレン, H. 『聖書の研究シリーズ 詩編詩人の信仰』, 船水衛司(訳). 教文館. 1983.
- ルター, M. 『主は私の羊飼い 詩編 1 編、8 編、23 編の講解』, 金子晴勇(訳). 教文館. 2021.
- ロジャーソン, J. W. and マッケイ, J. W. 『ケンブリッジ旧約聖書註解 13 詩篇 1-72』, 村上達夫(訳). 新教出版社. 1984.
- ローフィンク, N. 「詩編理解にとっての最終編集の意義」. WAFS 刊行会(編)『主の全てにより人は生きる』所収, 63-84, 計良祐時・清水宏(共訳). 有限会社リトン. 1992.
- ロングマン, T. 『旧約聖書の基本－各書の内容・著者・時代・文学・ジャンル・つながり』, 老松望・楠望・武田満(共訳). いのちのことば社. 2023.
- 秋吉輝雄. 『旧約聖書人物の系譜・歴史年表』. 燦葉出版. 1978.
- 浅野順一. 『詩編－古代へブル人の心－』. 岩波新書. 1972.
- 飯謙. 『旧約詩編の文献学的研究 第一ダビデ詩編を中心として』. 新教出版社. 2006.
- 飯謙. 「詩編」. 『新共同訳旧約聖書略解』, 木田献一(監修). 日本基督教団出版局. 2001. 573-673.
- 飯謙. 「第一章 詩編の基礎知識」. 飯謙他著『聖書協会共同訳詩編を読むために』. 一般財団法人日本聖書協会. 2021. 9-38.
- 石川立. 「ヤハウエはとわに！詩編 23 編の一解釈」. 『日本の聖書学』(ATD・NTD 聖書註解刊行会) 4 (1998) : 1-25.
- 大島力. 『聖書の中の祈り』. 日本キリスト教団出版局. 2016.

- 大住雄一. 『神のみ前に立って 十戒の心』. 教文館. 2015.
- 大住雄一. 「詩編 23 編」. 『アレタイア 聖書から説教へ』(日本基督教団出版局) 15 (1995): 53-58.
- 大住雄一. 「『詩編研究』への補遺－アルファベートうたをめぐって－」. 大野恵正・大島力・大住雄一・小友聡(編) 『果てなき探究 旧約聖書の深みへ 左近淑記念論文集』所収, 196-206. 教文館. 2002.
- 小田島修治(本間敏雄監修). 『ヘブライ語で遊ぼう!』. 日本キリスト教団出版局. 2009.
- 小友聡. 『旧約聖書と教会 -今、旧約聖書を読み解く』. 教文館. 2021.
- 勝村弘也. 『詩編注解リーフ・バイブル・コンメンタリーシリーズ』. 日本基督教団宣教委員会. 1992.
- 熊澤義宣. 「信仰と生と死」. ルーテル学院大学神学セミナー(編) 『死と信仰』所収, 51-72. 財団法人キリスト教視聴覚センター. 1997.
- 左近淑. 『詩編研究』. 新教出版社. 1971.
- 左近淑. 『詩編を読む 旧約聖書 3』. 筑摩書房. 1990.
- 佐々木勝彦. 『まだひと言も語らぬ先に一詩編の世界』. 教文館. 2009.
- 関根正雄. 『関根正雄著作集 第10巻 詩篇註解(上)』. 新地書房. 1980.
- 高木幹太. 『生の意味』. 日本YMCA同盟出版部. 1966.
- 田中光. 『新しいダビデと新しいモーセの待望－イザヤ書の正典的解釈』. 教文館. 2022.
- 田中光. 「旧約聖書と「永遠の命」(前編)」. 『神学』(東京神学大学神学会) 82 (2020): 5-30.
- 田中光. 「旧約聖書と「永遠の命」(後編)」. 『伝道と神学』(東京神学大学総合研究所) 11 (2021) : 113-183.
- 田中光. 「旧約聖書における「摂理の信仰」の探究－詩編を中心に」. 『神学』(東京神学大学総合研究所) 83 (2021): 25-83.
- 田中光. 「詩編によって形作られる霊的生活：I テサロニケ 5:16-18 におけるパウロの勧告を形にするために」. 『伝道と神学』(東京神学大学総合研究所) 11 (2021) : 185-207.
- 田中光. 「詩編を祈り、賛美するために：詩編の多面的側面からの探究(第一回：シリーズ全体のイントロダクション)」. 『季刊教会』(改革長老教会協議会) 129 (2022): 6-26.
- 田中光. 「詩編を祈り、賛美するために：詩編の多面的側面からの探究(第二回：イスラエルの詩編①個々の詩編が生み出された文脈)」. 『季刊教会』(改革長老教会協議会)

130 (2023) : 9-26.

田中光. 「詩編を祈り、賛美するために：詩編の多面的側面からの探究（第三回：イスラエルの詩編②書物としての詩編が生み出された過程）」. 『季刊教会』（改革長老教会協議会）131 (2023) : 15-31.

月本昭男. 『詩編の思想と信仰 I 第 1 篇から第 25 篇まで』. 新教出版社. 2003.

津村俊夫. 『聖書へブル詩の並行法－詩行の反復表現が表すもの』. ひつじ書房. 2022.

広田叔弘. 『詩編を読もう上 嘆きや喜びの朝へ』. 日本キリスト教団出版局. 2019.

船水衛司. 「旧約聖書における『創造』と『世界像』」. 『神学』（東京神学大学神学会）27 (1965) : 35-65.

本間敏雄. 「帰り行く家」. 『形成』（椎の樹会「形成」委員会）276 (1993) : 38-39.

本間敏雄. 「主はわたしの羊飼いな」. 『形成』（椎の樹会「形成」委員会）289・290 合併 (1995) : 12-13.

森彬. 『聖書の集中構造 上 旧約篇』. ヨルダン社. 1991.